

韻鏡新解

前編

大島正健著

大島正健著

韻鏡新解
前編

韻鏡新解序

著者曾つて字音を通じて、支那日本交通の跡を探る要あることに着想し、我が常呼の音と支那の現代音との間に甚だしき差異あるを怪しみ、漢音吳音と南京官話とを比して、細かに對照を試みしに、兩者の變化の中に、定まりたる法則の存するを感得したれど、我音と官話とは、既に年代に大懸隔あり、官話を基として、我音を還原し得たりとて、果にして正當ならべきものなりや否や、判斷すること能はず。大いに惑ふ所ありて之を漢文學の老先生に謀りしに、唐代の古音を知らんと欲せば、宜しく先づ「韻鏡」に就いて學ぶ可しと語り聽かされ、直ちに「密光韻鏡」を購ひて、其研究に着手せしが、當初は其意を捕ふること容易ならずして、恰も暗中に物を探るが如く覺えたりしが、凡そ人の手に成りし者にして、解し得ずと言ふことあるべからずと、勇を鼓して研究を進め行さしに、次第次第に明を得たるが如き心地せられ、傍更に「韻鏡」の古書數本を購ひ、斯

道に力を注ぎたる學者の諸説を窺ひ、參考とすべきこと少からざりしか。然かも其の説く所、根本の問題に接觸する者、殆ど無きが如く思はれにり。尊敬すべきこと「漢吳音圖」の作者の如きも、猶且其解釋を誤り、累を彼世に貽したることの多きは、誠に遺憾と爲さざるを得ず。

「韻鏡」は難解の書なり。俗に「韻鏡」十三年と稱するは、長き年月を費やさずれば、解釋出來難しと言ふ諺あるべし。又「韻鏡」小頓悟り」と唱ふも、は「韻鏡」を解するは、學得に非ずして、悟道に由ると言ふ意あるべし。著者の研究、之に費やしたる正味の時間、短かゝるべしと雖も、着手以來十三年を倒置して、既に三十有餘年の久しきに亘り、神秘の悟道に訴へざるも、學理に従ひ行きて、聊か音韻の法則を辨ふるに至れり。七音三十六字母と二百六韻とも、羅馬字を以て示し、又内外開合等韻の別を説き、明治の昭代に「韻鏡」に關する著作の出でざるを慨し、其末年に於いて「韻鏡音韻考」と改訂「韻鏡」と著はして、之を世に公にせり。然るに行文の不注意な

ると穿鑿の行き届かざるとに由り、同學の友の疑惑を招き、又批判を受けたる所あり。加ふるに常に僻地に住し、材料の不完全なるより、十分の意見を述ぶること能はざる所多かりしは、大いに遺憾と思ひ居りしが、龜田文學士の篤き同情と親しき斡旋とに由り、『韻鏡』の元和本を得、又永祿本を一見し、其後東京、大阪、京都、名古屋の書肆に就き、寛永本、明暦本、寛文本、其外の古本と年月を懸けて蒐集し、『韻鏡』の書二十餘種を坐右に備ふるに至れり。其中にて最も珍重とせるは、鄭樵が『七音略韻鑑』にして、此書に據りて開發せられたること最も多きを覺えたり。上記の書類は不幸にして關東大震災に際し、僅かに數部を残して、他は焼失せり。されど幸にして『國學院雜誌』に投稿せる、『韻鏡』に關する數篇の拙文の残存せるあり。『音韻考』に大訂正を加へ、研學の上に不要なるべしと思はるゝ章を削り、殘存せる諸篇を基として更に新たに稿を起し、之を加へて愚見を發表することゝせり。其の論ずる所、概して先人の未だ曾つて唱道せざ

りし所の者多ければ、或は淺識獨斷の見解と非難せらるゝ點少からざるべけれ。世之に對する同好の人の批評は衷心より歡迎する所なり。支那に於ける「韻鏡」の由來詳かならず。岡本保孝翁の「韻鏡攷」に、宋史藝文志に釋元冲「五音韻鏡」一卷を載せたりと云ひ、明の王圻の「續文獻通考」に崔敦詩宋「韻鏡」を著けすと云ひ、又宋の吳棫七音韻鏡を著けすと云ひ、又元の古今韻會舉要也此音韻鏡を引けりと云ふ。既に「五音韻鏡」の名目ある以上は、其書は唐代七音製定以前の作りたるべかりしこと明かなり。晚唐或は五代時代の原作なるべしと云ふ。現今行はるゝ所の「韻鏡」に七音の名を冠せたるを現れは、此書左來の「五音韻鏡」を基礎とし、唇、舌、齒、喉の五音に、半舌、半齒の二音を加へ、之に「唐韻」を配して、改作したるものなり。三十三字母は晚唐の僧守溫の作りたるものなりと云ふ。鄭樵が「七音略韻鑑」に、音韻運用の妙義は梵僧之を傳へて、華僧之を讀くとあり。是に由つて「韻鏡圖上」の音韻の配置は、悉曇の法則に従ひて、起草せら

れたるものりることを知り得べし。司馬光の「切韻指掌」劉鑑の「切韻指南」の如きも或は「五音韻鏡」の原圖に據り、唐代の七音三十六字母と二百六韻とを基として、改作せられたるには非ざるかと想像せらるゝ所あり。鄭樵は何處より「七音略韻鑑」の原本を得たるか、之に接して一大發見と爲せるが如く、一唱三歎せざるを見れば、韻鏡は夙くより佛家の手に秘藏せられ居りたるものか、彼地にては廣く行はれざりしものと見えたり。張麟之も亦「指微韻鑑」の原本を得て、之を學ぶに苦心しにると説けり。前記の岡本氏も多數の書目の中より、韻鏡に關する書僅かに二三を拾ひ上げたるに過ぎず。鎌倉の文永年間、に於いて始めて我國に傳はり來りしは、張麟之が「指微韻鑑」にして、足利の享祿年間に於いて、之を翻刻したる者と、我國の韻鏡の原本と爲す。

「七音略韻鑑」は「唐韻」に據り、「指微韻鑑」は「廣韻」に據りたるものなり。細かに其内容を考查すれば、韻鏡と「唐韻」「廣韻」とは、往々一致せざる所あり。又

詳かに「韻鏡」の諸轉に就いて考察するに、當時の南北函音に對し、或は北音に同じき者あり、或は南音に合する者あり、或は又「唐韻」「廣韻」と異なれる、現代音に通ふ者ありて、其原作の地は輕々しく斷定し難し。尚此問題に關しては、別者「韻鏡」と「唐韻」「廣韻」に於いて論ずる所を参照すべし。七音三十六字母「唐韻」二百六韻の分類、又之を基としたる「韻鏡」四十三轉の排列は、現今の音韻學に徴すれば、決して完全なる構造として見るべきものに非ざるは、論を要せざれど、出來得る限は、原作者の意を推察し、之を尊重して、徒らに破壊を試みず、忠實に其解釋を施すは、是れ今人の古人に對する道なるべし。只其解釋の最も能く學理に叶はんことを希ふのみ。

大正十五年十月

著者 大島正健 識

韻鏡新解前編目次

第一章 七音三十六字母考

一

第二章 內轉外轉の解

三

第三章 開轉合轉の解

八

第四章 等韻直切の説

二六

第五章 二百六韻考

三

韻鏡新解前編

大嶋正健著

第一章 七音三十六字母考

韻鏡日韻を以て經とし、音を以て緯とし、縦横に文字を排列する圖を作り、一目して其音韻を明かりらしむるため、四十三轉の分類を設く。音口唇、舌、牙、齒、喉の五種に、半舌、半齒の二種を加へて七種と爲し、之を清、次清、濁、清濁の四類に分ち、又其中に輕重ある者ありて、三十六字母を以て之を代表し、韻には平、上、去、入の四聲ありて、之を開、發、收、閉の四等に分ち、次第を立て、二百六韻を排列す。

七音に屬する三十六字母は、其音に近似せる羅馬字を以て寫せば、大略九の如くなりるべし。支那音と英語の音とは、其性質に於いて異なる所多きが故、單に羅馬字のみに由りて誤られざる様、注意する所あるべし。

七音三十六字母表

重唇音	幫	滂	並	明	清	濁	清	濁
輕唇音	非	敷	奉	微	泥	心	禪	之
舌頭音	端	透	定	泥	疑	心	禪	之
舌上音	知	徹	澄	娘	疑	心	禪	之
牙音	見	溪	群	疑	疑	心	禪	之
齒頭音	精	清	從			心	禪	之
正齒音	照	穿	牀			審	禪	之
喉音	影		匣			曉		
半舌音								
半齒音								

清、次清、濁、清濁

清音、濁音の別は、説明の要無かるべし。

次清音は出氣音或は激音なるべし。即ち口腔内の障礙を破りて息が急位に口外に出づる音なり。清音と爲す羅馬字の右肩に、^hの符號を附して之を表はす。清音幫の^h、端の^h、見の^hに對し、次清音滂を^{ph}、透をth、溪を^{kh}と記するが如し。又^{ph} ^{kh} thの如く^hを以て此音を表はすことあり。

清濁音は聲の鼻孔に通ひて出づる音なり。明の^m、泥のⁿ、疑の^{ng}の如し。又或は聲の舌に遮られ、上顎に觸れて出づる音をも云ふ。喻の^y、來の^l、日^jの^lの如し。此音「韻會」に次濁音と曰ひ、「切韻指掌」に不清、不濁と曰ひ、「切韻指南」に半清、半濁と曰ふ。

清は常呼の漢吳兩音の中に、時に或は濁に響かず者ありと雖も、其は寧ろ例外にして、韻鏡に従ふを以て定則とす。次清は收音には現はれ

ずして、皆之を清に移すを法とす。濁は我方に清と混ずる、不規則なる
 用法無きに非ざれど、大體に於いて、英音は韻鏡に従ひ、漢音は之を清
 に作るを法とす。獨り喉音の濁に對しては、先人の耳に清に聞こえた
 るも、濁に聞こえたるもありたるものと見え、英音にては、兩類の假名
 を混用せり。清濁は英音は牙音のみは濁、漢音は喉音、半舌音の外は濁
 に作るを常とす。尤も牙音の中には、常呼の漢音は清に響かざる者あれ
 ど、定法として判る可からず。英音は清濁の唇音は日ハに對して麻行
 の假名、舌音は日ハに對して泰行の假名を當て、漢音は唇音、舌音、半舌
 音、共に濁に作るを常格と爲せど、又唇音のハ、舌音のハに對する假名
 を常用とする者多し。清濁の喉音は日ハに對して也行の假名、ハに對
 して唯行の假名を當つ。

唇音に輕重の別あり、重く兩唇を結びて而して發する音を重唇音と
 爲し、輕く兩唇を合はせて、而して後其間より發する音を輕唇音と爲す。

重唇音の幫、滂、並は、明は、*ㄇ*とすべきこと疑なし。輕唇音は非に、*ㄈ*、敷に、*ㄌ*、奉に、*ㄆ*、微に、*ㄎ*、富つ。此音は今の支那音に徴して考ふるに、合唇音なりが如し。元來英語の *f* は半唇音なりが故、合唇音に對して、之を用ゐるは精確ならずと雖も、適當の字無きが故、止むを得ずして、借り用ゐたるなり。清濁音の徴には、*ㄌ* の頭に *・* と附し、*ㄌ* と爲して、之を當つ。即ち輕唇音中の鼻音なり。官語にて *ㄌ* を用ゐる。舌音に舌頭音、舌上音の二種あり。之に又輕重の別を立て、上は重、下は輕と爲す。

舌頭音は、舌頭の、上顎の前部、或は齒槽に觸れて出づる音なり。端の透の *ㄊ*、定の *ㄌ*、泥の *ㄋ*、これなり。

舌上音は、舌頭音を生ずる舌の位置の變はり、舌身の上顎に觸れて出づる音なり。舌頭音の羅馬字の下に、*ㄴ* の符號を附し、知と *ㄴ*、徹と *ㄷ*、澄と *ㄸ*、娘と *ㄹ* と爲して、之を表はす。と *ㄷ*、*ㄸ*、*ㄹ* は、*ㄷ*、*ㄸ*、*ㄹ* に *ㄴ* を添へた

る *ly dy ny* に類する音と見做して可なり。蘇州音にては *ly dy ny* と當つ。

牙音。

見日尼溪日尼辟日牙疑は *ny* を以て表はせど、此牙音は舌根を以て息又聲を遮りて發する喉音なり。此音既に牙音の名額ある以上は、純粹の喉音には非ざるべし。喉音は口を開きて發する音なれど、牙音は齒を以て口を開き、而して後牙の間より發する音なるが如し。されば其の息又聲を遮る場所は、舌根に非ずして舌身に在る位置なるべし。故に *ny* 等の字は唯借り用ゐるに過ぎず。此音時には純粹の喉音に變はり、牙喉両音往來することあり。歐洲語の *ny* にキテ硬軟の別を生じ、支那官話に南京音、北京音、*ny* と爲るも、此牙音の類なるべし。

齒音に齒頭音、正齒音の別ありて、上を重下を輕と爲す。

精清從心邪は齒頭音の字母なり。按ずるに精清從にては上齒頭、心邪

にては下齒頭に、舌端の觸れて出づる音なるべし。心邪は又、細齒頭音と呼ぶ。蘇州音に徴するに、前者は *tc* *tc* にして、後者は *s* *z* に當る。強き摩擦音なり。故に兩清兩濁あれば、清濁なりし。又細齒頭音の中に次清無きは、心の *s* は既に氣音の性質を有するに由りてなるべし。

照、穿、牀、審、禪は正齒音の字母なり。按ずるに正齒音は、齒頭音を生ずる舌の位置動き、舌身の上顎に觸れて出づる音りるべし。審、禪は又細正齒音と呼ぶ。齒頭音の羅馬字の下に、*h* の符號を附し、照を *tc*、穿を *ts*、牀を *dz*、審を *s*、禪を *z* と爲して之を表はす。 *tc* *ts* *dz* *s* *z* は *tc* *ts* *dz* *s* *z* に *tc* *ts* *dz* *s* *z* に類する音と見做して可なり。蘇州音にては *ch*, *ch*, *ch*, *ch*, *ch*, *ch* を當つ。之を舌上音と分つたため *ch* を *ch* に改むること適當なるべし。但し舌上、正齒の兩音、*ch* を用たる所、今は明確りる區別無きが如し。正齒音に清濁無きは、齒頭音に同じく、細正齒音に次清無きは、細齒頭音に同じ。

喉音の字母影曉匣喻に羅馬字を當つるに際し疑の存するものあり。
 現代支那音に由りて影母所屬の字の音を探るに並の如く依りて阿の
 の如く皆母音性の者なり。されば此等の諸字は各字皆發聲のある
 ものと假定し只形式を調ふるため空位に對して字母を設けたるも
 のか或は當時の支那音には此類輕微りる發聲の子音を備へ居りた
 るものか疑の因りて起る所なり。反切を參考するに並に衣嫁切依に
 於布切阿に烏何切りとあるを見れば發聲の子音の在りたるが如
 く考へらるれば然るべき證として見るべき者無し。故に影母音性
 の者と爲し反切の音字と爲るが如き必要の場合には空位と爲し、
 を以て之を補ひ置くことす。但し合轉には此を用ゐるを常とす。
 曉は今の支那音を參照し、んを以て表はす。この古音はりりしか將た
 らなりしか、之を判するに若しむ所なるが其實或は兩者の間之音を
 りしかを判じ難く牙音のんは存せしも喉音のんは存せざりとは

斷じ難かるべし。我漢音吳音は之を寫すに加行の假名を以てす。我音も亦純粹の喉音なりしか。將た牙音の類なりしか。容易く判じ難くとも。雖も喉音の左を寫すこと能はざりしに由り、之に近似の假名を附したるべきこと疑無し。

匣は影の清に對する濁なり。影を母音性の者とせば、之に對して、匣の如き濁を生ずること具意を得ず。蘇州音に徵するに、匣母所屬の字は、鞋のえ、痕のえ、下のり、の如く、母音の左肩に出氣の符號を附して之を寫す。されば匣は影の次清と爲るべし。支那の出氣音は、渾然として濁音の如く聞こゆることあり。分けて喉音の清濁は、餘音に類せざれば、若し影を前に述べたるが如き、母音性の者なりとせば、匣は母音性の濁と見做すこと妨無かるべし。我吳音にては、此類下のゲ、行のギャウ、降のゴウの如く、濁音にて記するを定則とす。又會のヰ、和のワ、横のワウの如く、今口音のときは、其儘和行の假名にて寫すことあり。如く古

今の音を考へ合はせ、匣は影の空位に、出氣の符號を附して、濁音を表
 はすことゝせり。官話にては匣は曉と等しく見たり。曉匣雙飛又曉匣
 往來等の名目の韻書に記載しあるを見れば、早くより兩者混同の頗
 同ありたるものゝ如し。我漢音にては、兩者共に加行の假名を以て之
 を寫す。影曉共に清なるは如何。曉は影に比すれば、硬聲とるべかりし
 に由り、匣は既に變態の濁なりとせば、何故に曉と變態の次清と爲さ
 ざりしか。別に深き理由無かるべし。玉篇指函韻學集成、康熙字典には
 之を次清と爲す。按ずるに曉と清と爲すは、其當時其音影に比すれば
 強かりしと雖も、後世の如く、出氣の失せんとして、其力の稍弱かりし
 に由りたることなりべし。匣は曉よりも其勢尚一層鋭く、遂に濁力如
 く聞こえたるものなりらん。中原雅音に曉匣を一にしるは、匣の硬聲
 の稍墜音の如くさこゆを嫌ひて、曉の如き稍軟かざる聲に化せし
 めたるものなりらん。是れ所謂元時代の都音なりべし。官話の如き、廣東

音の如き、又我漢音の如きは、此系説に屬するものと見做すべきか。
喻は之にリを當つ。然れども英語のフは喉音とは見做し難きに由り、
是も亦借り用ゐたるに過ぎず。曉匣の一雙を爲すが如く、影喻も亦一
雙を爲して相通せり。今の支那諸州の音にも、亦かかる例多し。官話廣
東音にて、影の倚も、喻の以も、共に均しく同音なるが如し。影の幽、喻の
由の如きも亦然り。匣喻往來も其例無きに非ず。蘇州音にて又の
と爲りて、喻に移り、官話にて雄の *kyung* と爲りて、匣に入るが如し。右
の外、牙音の疑の影、喻に通じ、齒音の邪の喻に轉ずるが如き例もあり。
來日の二母は清濁音に屬し、來を半舌音、日と半齒音と呼ぶ。

半舌音

今の支那音を寫せる羅馬字を参照し、來は *l* と以て表はす。按ずるに
來は舌端を上顎に當て、聲を其兩側より洩らして、發せしむる音なる
べし。

日は我音にては稍確に寫し得べからざる。最も解釋に困難なる音なり。此字母に屬する者は漢音にては左行濁音、吳音にては余行の假名と用ゐるを定則とす。人如は漢音ジヌ、ジヨ、吳音ニヌ、ニヨと記するが如し。二ハ齒音の禪、舌音の孃に對する吳音の假名と相同じ、蘇州音にては此類の中歟あり、*ny*ありて、或は禪に通じ、或は孃に通じ。其の禪に通ずるに當り、澄牀所屬の者之に伴ひて混入することあり。廣東音にては、日は喻に移る。來を *tsau*、人を *tsau* と呼ぶが如し。廈門音にては日は來に通じ、齒を *tsin*、人を *tsang* と唱ふ。官話に對しては通例 *ts* と以て寫せど、又 *ts* を用ゐることあり。日兒雙の日兒の如し。以上諸種の變化より考ふれば、舌端を齒の方より動かし始め、口腔内にて稍之を上方に曲け、更に舌身を上げて發する音なりしかと察せらる。かゝる不定の位置有るが故、古の運動僅かに其處を變ふれば、舌

上音、正齒音、喉音、半舌音と轉じ行くものりるべし。日は官話の記法に従ひて、*ジ*を以て之を表はす。英語の發音に由れば、この*ジ*は半濁音の性質を有れば、適字を知らずといへども、姑く借り用ゐて、其位置を塞ぐ。

第二章 内轉外轉の解

内轉とは一等に *○(オ)* 一等缺位のとさは二等以下に *○(オ)* *ㄣ(ウ)* 若しくは *ㄷ(イ)* の母音ある者と言ひ、外轉とは一等又二等に *ㄶ(ア)* 三等 *ㄷ(イ)* 四等に *ㄷ(イ)* の母音ある者と言ふ。開合對次する兩轉にては、内外の別同一にして、合轉は開轉に従ふを定則と爲す。

内轉の特徵左の如し。

一、二等には正齒音のみ位することを得れど、他の諸音は之に伴ふこと能はざること。

二、第二十二、第四十一の兩轉と、第十六轉の寄韻とを除く外、輕唇音は

内轉にのみ存じて、外轉に屬せざること。

三、匣母は三等に現れず、又第十七轉の外、四等にも現れざること。

四、第三十七轉を除く外、來母は四等に現れざること。

内轉を分ちて二類と屬す。

第一類は二等以下に(エ、ヒ、ウ)の母音ある者なり。第一、第二、第十一、第十二、第三十一、第三十二、第四十二、第四十三の諸轉是れなり。但し第二十、第二十八の兩轉は二等以下空位なり。此類の中に入れ置くこと。又以上の諸轉につき注意を要すべき付あり。

一、第十一轉を除く外、諸轉一等韻を有すること。

二、第四十二轉を除く外、諸轉を通じて唇音は輕母なること。但し、第一轉の清濁音は重母なり。

三、諸轉を通じて、四等には唇、舌、牙の音無く、常に存するは齒音と、喉音の喻母所屬の者なり。但し、第四十二轉の舌音の下に例外あり。

第二類は二等以下に^(イ)の母音ある者なり。第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十七、第十八、第十九、第二十、第三十七、第三十八の諸轉是ハなり。以上の諸轉につき、注意を要すべき件あり。

一、一等に^(オ)の母音を有する第十七、第十八、第三十七の三轉を除く外、諸轉一等韻を有せざることを。

二、第二十、第三十七の三轉を除く外、諸轉を通じて、唇音は重母なること。但し第三十七轉の清濁音のみは重母なり。

三、第九、第十、第十九、第二十の四轉を除く外、四等には唇、舌、牙、齒、喉の諸音の現はれ得ること。

右の兩項より推して、第九、第十、第十九、第二十、第三十七の諸轉は、其響の軟かなりしを察し得べし。

第一類と第二類とを對照するとき、其特徴として、第一類の諸轉は、第二類の諸轉に比して、其諸韻の響の弱かりしを示す。

第二十七、第二十八の兩轉は諸本之を内轉の部に置けど「發聲」は合類韻
 鏡とどに由りたるものか、之を外轉の部に置けるが、其日和漢對譯梵漢
 對譯に就きて見るが如く、韻の聲に α (ア)の聲あるが故りるべし。今の諸
 州には α (ア)の聲多し。韻鏡の音は、當時既に之と同一たりしものゝ如し。
 第三十一、第三十二の兩轉は内外所屬につき、疑の生ずべき所あり。和漢
 對譯、アウ、ヤウの假名にして、梵漢對譯亦 *ang* (アング)の聲りるを示す。然
 りとせば、是は外轉に屬すべき筈なり。又正韻、字彙等は陽の韻の、北音に
 ては *yang* (ヤング)の聲りりし、江の韻と相通したるを示す。是亦外轉りる
 べきと證するに似たり。切韻指掌も亦陽江と同類の中に置けり。然るに
 細かに兩轉の性質を探るに、悉く内轉第一類に屬すべき條件を具備す。
 因りて其韻を今の南音の如く *ang* (オーング)の聲りりしと斷定す。
 韻鏡の古書に第十七、第十八、第十九、第二十の四轉を外轉に作る者あれ
 ど、其理由を窺ふこと能はず。第六、第七の兩轉對第十七、第十八の兩轉、又

第九、第十の兩轉對、第十九、第二十の兩轉は、無尾韻對、有尾韻の關係にして、同性質の轉りれば、無尾韻の方と共に、有尾韻の方も、内轉りるべきと論じし。外轉と爲したるは誤記りるべし。

外轉は一等、二等に a (p)、三等、四等に e (w)の母音を備ふること既に述べたるが如し。第三、第十三、第十四、第十五、第十六、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十九、第三十、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十九、第四十、第四十一の諸轉是れなり。外轉の特徴左の如し。

一、唇、舌、牙、喉、半舌の五音は、齒音と共に二等に位し得ること。

二、唇音は二等にては全部、三等にては第二十二、第四十一の兩轉と、第

十六轉の寄韻と除く外、皆重母りること。

三、匣母は内轉と同じく、三等には現はれざれど、之と異なりて四等には現はれ得ること。

四、來母日四等に現はれ得ること。

内外兩轉に属する所の諸韻の性質を考查するに、内轉の方は其響輕くして弱く、外轉の方は其響重くし強し。内轉外轉の別は、吸音、呼音の別と同様なるべく、内轉の韻は即ち吸音、外轉の韻は即ち呼音に當るべし。轉とは發聲の位置に由り、口腔の内外に起る音轉の義有るべし。晚唐初宋の頃よりは遙かに下りたる後世の人の作整せる韻圖に、内外の別を設けたるものあるは、能く其書と同時代の音を代表せるものか、或は只古法に則れるものなるか、疑の存する所なり。

第三章 開轉合轉の辨

列記せられたる四十三轉には、相隣りて、開合對次する者多し。開合を分つは、音に由るべきか、將に韻に由るべきか、稍疑ある所なり。但、大體より推して考ふるときは、音に由るものと見る方が適當なるが如し。合の音を

表はすに、羅馬字の *u* 或は *w* を以てすること常とれど、既に音に由るものとせば *w* を用ゐること合理とるべく、是迄は一般に此形式を取り采りしが、近來支那の學者 *u* を常用と爲すに因り、廣く之と調和を保つために、其記法に従ふこととせり。*w* も *u* も只合の標記なるのみにして、強ちに合唇音なりと斷ずべからず。其實は支那音にて合口音と稱する者は、音と韻との中間の發聲に屬するものゝ如く、故に西洋人の支那音を寫す羅馬字の記法には、屢に *w* と *u* とを、其間に差別無きが如く用ゐることあり。今 *u* を以て合の標記と爲すとせば、開の字は *uan* にして、之に對する合の官は *uwan*、開の辰は *shen* にして、之に對する合の轉は *shuen*、開の恣は *shu* にして、之に對する合の醉は *shu* 重なるか如し。開の字は *shu* にして、之に對する合の筭は *shun* と記す。此の *shun* は *shu* の變形なり。又筭と *shun* とも記す。是れ *shun* 又 *shun* の母音の融化したる形なり。影母所屬の字には、其合口音に對して *w* を用ゐると常とす。開の阿

唇音は合口の發聲りるか故、之に屬する開轉の韻の字に於て、往々合轉の韻に紛るゝことありて、「倉光」外數字に、開轉の字を取りて、合轉に移せる者あり。是は彼爲切陟、步行切傍、兵永切丙の如き、韻字の合口の聲なる廣韻の反切に重きを置きて、誤られたるものなるか、或は同様の解釋を施せる、後世の支那人が作製せる韻圖に據りたるものなるべし。今舊本を參照して、陟、廢、彼、殛、被、靡を第四轉に、非、眉、鄙、詒、否、美を第六轉に、福、紇、紛を第二十一轉に、幫、傍、榜を第三十一轉に、丙、皿を第三十三轉に置く。又反對に合轉に入るべき字を、開轉に移せる者あり。今之を改めて、ハ、ハ、振、倭と第二十四轉に置く。

鄭樵の「七音略韻鑑」にては、開合の名目を立てずして、輕重の別を設けたり。重は即ち開、輕は即ち合に當るなり。此外に輕重尚別義あり。其は後に説くべし。「七音略」にては、重中重、重中輕、輕中重、輕中輕の四目を立つ。重中重と重中輕とは開にして、輕中重と輕中輕とは合に當るなり。開合對次

の諸轉にては、重中重の輕中重に對するあり、又輕中輕に對するあり、又重中輕の輕中輕に對するありて、是は韻の性質に基く變化を標準と爲しにらものゝ如し、要するに開合の別は支那音の特質に基く變化にして、音と韻との結合の間に生ずる現象なれば、之と音のみに歸するも、韻のみに歸するも共に説明不完全と爲るを免れ難し。漢麟之が作りりと稱する書に基きたる、我國の韻鏡の原存なる享祿五年に、第二、第三、第四、第十二の四轉に、開合の各目を附したるを「見」に、唐時代に比すれば、開と合と混亂し、精密に其區別を立て、難かりし宋時代の音を標準としにるに由るものなりべし。著者然かく信する理由ありて、開か合か其名を一にし、開合の名稱は全く廢すべきものなることを主張す。

第一轉は享祿五年に作り、寛文年、訂正韻鏡以後の諸本多く合に作り、七音略韻鑑は重中重に作る。重中重は即ち開なり、從ふべし。

第二轉は享禄本開合に作り、訂正韻鏡以後の諸本多く合に作り、七音略韻鑑は輕中輕に作る。輕中輕は即ち合なり。從ふべし。

第三轉は享禄本開合と爲す。一説に唇、牙、喉を開、舌、齒を合と定むれど、此説採る可からず。七音略韻鑑は重中重にて開なり。從ふべし。

第四轉は享禄本開合と爲す。是れ宋人の唇音の合口音の如く聞こゆるに由りて、誤りて開合併置と見做したることとるべし。七音略韻鑑は重中輕にして開なり。從ふべし。

第十一轉は合に作る者多しと雖も、享禄本開なり。漢吳音圖說之に則りて、更に其の然るべき證を擧げたり。是れ從ふべし。七音略韻鑑は重中重にして開なり。

第十二轉は享禄本開合に作り、諸本多く合に作る。七音略韻鑑は輕中輕に作り、合するべきこと疑無し。

第二十六轉は享禄本合に作れど、其理由を發見すること能はず。恐らく

日誤寫の傳りり來りたるものなるべし。七音略韻鑑は重中輕にして開りるべきこと論無し。

第二十七轉是亦同斷。七音略韻鑑は重中重にして開りり。

第三十八轉は開に作るあり、合に作るあり、開合に作るありて、諸本一定せず。韻尾の唇内撥音ム(ハ)同促音フ(ル)と有てる者は合ありとの説ありと、杜撰にして信ずるに足らず。此轉は第十七轉に類するを以て、無論開りるべし。七音略韻鑑は重中重にして開りり。

第三十九、第四十の兩轉は、諸本多く開に作る。磨光之と合に改む。韻尾ムフなるに由り、合まりと云ふ説は採る可からず。享祿本第三十九轉を開、第四十轉を合に作る。是は能く開合對次の順序に協ひて、從ふべきに似たりと雖も、未だ第四十轉の合なるべき性質と見出だすこと能はず。七音略韻鑑にては第三十九轉は重中重、第四十轉は重中輕にして、兩轉共に開に當る、從ふべし。

第四十一轉は開に作る者多しと雖も、今享祿本に従ひて合と爲す。此轉は韻尾ム(ㄢ)フ(ㄣ)と、ヌ(ㄢ)ツ(ㄣ)との差異にて、第二十二轉に類し、合するべきこと論無し。セ音略韻鑑は輕中輕にして合なり。

後世の韻圖の「切韻指南」「康熙字典」「切字肆考」等に擧げたる者の如きは、古韻十六攝の一等、二等と、開口呼、合口呼に分ち、三等、四等と廣通偏、狹の四門に分てり。この廣通偏、狹の別は、本論には大なる關係無きが如く見ゆるが故之を省きて説かず。又古韻十六攝の如きも、本論には無用の分別されば、之に手を觸れざることにせり。

又呼法に開口、合口、撮口、捲舌、咬齒、齊齒等の類あれど、其説明繁雜に亘り、之に擬して實際の運用を試むること頗る難く、且つ本論に關係する所少きを以て、是亦略して載せず。

第四章 等韻直勘の說

韻鏡は韻を分ちて、一、二、三、四の等位を定め、後人之以に開發收閉の名と設く。各等位に位する韻を列擧すること左の如し。

一等韻

冬

模

咍灰

痕魂

寒桓

豪

歌戈

唐

候

姥

海賄

很混

旱緩

咍

祭果

蕩

厚

宋

暮

代隊泰

恨恩

翰換

號

箇過

宕

候

沃

沒

曷末

鐸

覃談

咸敢

勘闕

合盍

登

等

澄

德

二等韻

江

講

絳

覺

皆

駭

怪夬

佳

蟹

卦

臻

櫛

山刪

產潛

欄諫

鎰黠

爻

巧

效

耕

耿

諍

麥

咸銜

跟檻

陷鑑

洽狎

二等三等位了韻

庚

硬

敬

陌

三等韻。

微

尾

未

飲

隱

焮

迄

文

吻

問

吻

元

阮

願

月

嚴

儼

嚴

業

凡

范

梵

乏

一、二、三、四の各等に位する韻

東

童_{三、四缺}

送_{四缺}

屋

二等、三等、四等に位する諸韻。

支、脂之

紙、旨止

眞、至、志

魚

語

御

虞

虞

遇

麻

馬

禡

陽

養

樣

藥

尤

有

宥

侵

腹

沁

緝

蒸

極
四缺

證
二缺

職

三等四等位了諸韻

鍾

腫

用

燭

祭

眞
諄

軫
準

震
禱

質
術

仙

獮

線

薛

宵

小

笑

清

靜

勁

昔

鹽

琰

豔

葉

仙等韻

霽

霽

霽

先

銑

霰

屑

蕭

篠

嘯

青

煙

徑

錫

絳

黠

効

添

忝

栳

帖

我國の韻鏡を論ずる學者、等位の別に至りては、未だ適當の解釋を與へ

たる者あるを見ず、果見を以て按ずるに、四等の別は左の如くなるべし。

一等はㄱ(ア)、ㄴ(イ)の聲なり。

二等はㄷ(エ)、ㄹ(ヨ)の聲なり、但し内轉の齒音にては、ㄷ(イ)、ㄷ(エ)の聲之に上

ることあり。

三等は(エ)(ヱ)(イ)(ロ)(目)(ハ)(王)の聲なり。

四等は(エ)(ヱ)(イ)(ロ)(オ)(ウ)(ウ)の聲なり。

一等と二等とは、直拗兩聲相對し、三等と四等とは、拗直兩聲相對す。一等と四等と、又二等と三等と、同聲の如く聞こゆる者あるは、其別母音の響の強弱に歸すべき、開發、收、閉の語は、右の區別以上、外に深き意義あるを覺えず。

唇舌、牙齒、喉、半舌、半齒の字母の音は、專ら現代音に基きて既に推定し、四等に配置する所の(ム)(ニ)(ロ)(ハ)の母音の位置は、漢音、吳音、支那音、朝鮮音等に照らして、上記の如くするべしと推定したるが、等位直拗の關係に當りては、容易く辨知し難き者あり。故に之を探るに、先づ古韻書の反切を憑據として、解決を求めんとす。

是より反切を基礎として、等位直拗の別を立てる考證を試むべし。

唐韻、廣韻、集韻、玉篇の反切に由るに、其別の最も明かりたるは、一等と三等

こゝに於て直切兩聲相混すること稀なり。宋以降に至りては、反切法漸く
 精確せられず、元の韻會、明の正韻等には、其差異の次第に現はるゝを見る。

因りて韻鏡との對照には、廣韻を中心として之を用ゐることゝせり。

反切に用ゐる所の二字を、上を切下と韻と言ふ、或は上を父字、下を母字
 とも言ふ。此篇にては、反切或は字母などと唱ふる所の字義の用法と、混

同する處を避けて、上を音字と名づく、これ七音の音の義なり、下を韻字

と稱す、これ二百六韻の韻の義なり。されば音韻合して、歸字の聲を生ず

るに並むなり。漢字は元來單音字なれば音韻容易く分ち難く、隨つて反

切法は韻字法に比すれば不便少からずして、屢々窮蹙の感を興ふるこ

とあり、理會を助くるため羅馬字を用ゐて反切を示せど、音韻相摩する

所該字法と口趣を異にする所ありと知るべし。

歸字は音字と音を同じうし、韻字と韻を同じうするを正則と屬す。音字

直聲、韻字直聲なれば、歸字は直聲、音字拗聲、韻字拗聲なれば、歸字は拗聲

するは反切の正法なり。音和法に異るものなり。今一、二、三、四の各等に就き細かに探索するに、一等の直聲、三等の拗聲なること疑ふべき所無し。反切の音韻兩字に當てたる羅馬字は、韻鏡の音韻を推測して記載したるものなり。或は廣韻とは記法を異にする所あるべし。吾論には關係なきが故、四聲の符號は略して記せず。

羅馬字を以て拗聲の字を表はすとき、舌音、齒音、半齒音の字母なりるときは、拗聲の符號を音の下に附し、其他の字母なりときは、之を韻の下に附す。

唐韻廣韻には等位を設けたるを見ずと雖も、其反切法を考査すれば、音字韻字の配置自ら韻鏡の等位に合ふを見る。等位の別は自然の發音に基き、人爲の製作に由りたるものに非ず。人或は疑ひ問ふ者あらん、既に韻鏡の音韻を推定し、以上は、何と告しんで、殊に反切に訴ふる要なきかと云來、韻鏡は反切の書に非ず。要は韻鏡に由りて、唐韻廣韻の

反切の歸着を求め、其の能く韻鏡の音と一致する所あるかを否かを探るにあり。等韻の直物は、韻鏡を以て本則と爲し、唐韻、廣韻大體は之に一致し、現代一般に行はるゝ所の常呼の音も、亦之を證すること多し。故に漢音、吳音、支那音、朝鮮音を以て、これに傍徴と爲せり。殊に牙喉兩音の切聲が如き場合に在りて、韻鏡の音不明なるときは、常呼の音を借りて、其證を確かむることあり。

唐韻、廣韻の當時の音は、今容易く麗上こと能はず。因つて其反切には推定したる韻鏡の音を附して、解釋を加へたれど、その韻鏡の音既に問題なり。各字に當てたる羅馬字は、韻鏡の法則に従つて記載したるものなり。れど、反切の音字、韻字の直物、何れに屬すべきか、其疑あるときは、獨斷の儘を避け、先づ其字に對する、我音、支那音等に由りて之を探り、而して其羅馬字の記法の正當なると否とを正すべし。

た何れも我方直聲より羅馬字の記法之に合ふ。

力

l(oh)

鐘

(h)ong

切

龍

long

右何れも我方拗聲より羅馬字の記法之に合ふ。

所

sh(o)

江

(h)ang

切

雙

shang

右は我方にて音字は拗聲より、韻字は直聲より、而して歸字も亦直聲より、されど之を官話に徴するに、江は *hiong* にして、雙は *shang* たり。韻鏡の音に當てたる羅馬字之に合ふ。

魚

ng(i)

羈

(h)u

切

宜

ngi

右は我方にて音字は拗聲より、韻字は直切の聲確かりらず。韻字の羈は居宜切より。是亦音字は拗聲にして、韻字は羈宜同聲に屬す。かる場合には大抵音字より推して韻字の拗聲なるを察し得べし。

反切の音字韻字の双方に拗聲あるときは、音字の拗の符合を有する字、母、其儘之を用ゐ、韻字の方の韻(其韻に拗の符號あるとき、之を去り)

後に附して歸字を作り、又音字の方の韻に拗の符號あるときは、之を
 韻字の方の韻(其韻に己に拗の符號あるときは他を捨て、其儘と爲し)
 に移し、音字の音と結びて歸字を作るべし。音字の方に拗の符號無きこ
 ころ、必ず韻字の方に拗聲を移し、或は留めて、歸字を作る可きものとす。
 嚴密なる反切の法則に従へば、既に拗聲ある以上は、其字母として拗聲
 の新字母を作るべき筈なり、即ち拗聲ある音の^カ、喉音の^ク、半舌音の^キ
 等と、^カ、^ク、^キ等と爲すべきが如し。此の如く爲るときは、三十六字母
 の上に字母の数を増すことゝなるが故、韻鏡の形式に反することゝ爲
 るべしと雖も、反切の説明に必要な場合には、上記の如き形を用ゐる
 ことあるべし。

音字韻字共に拗聲あるときは、雙方に粘着力あるものが、能く結合する
 が如く、音韻相摩し、兩拗聲相合して、分離し難き一拗聲と爲る。是れ反切
 法の綴字法と異なる所なり、羅馬字を以て之を表はせば、拗聲字多きに

邊音字若しくは、韻字より、一拗聲を切り捨つべき必要起る。反切法にては只音字より拗聲の音、韻字より拗聲の韻を取り、組み合はせて、歸字の音を作るなり。
 反切に訴へずして直拗の別、判然たる者ありと、一般の形式を示すかたの、特に例を出したる者多し。

一等韻

先づ一等字を考ふるに、時に例外無きに非ざれど、一般に音字韻字共に直聲の字を用ゐるを法とす。一等には輕唇音、舌上音、正齒音の存在を許さず。其位置に當る者は重唇音、舌頭音、齒頭音にして、反切に用ゐる音字は直聲なり。

博	pa (a)ke	毛	(m)iau	切	褒	pauc
德	t (o)ke	紅	(o) ong	切	東	long
息	a (o)ke	郎	(l)ang	切	衆	king ニヤ

牙音、喉音、半舌音も、音字は直聲りる一等字、若しくは四等字を用ゐるを常とす。

昔

𪛗(ㄛ)

哀

(ㄛ) ai

切

開

hai

一

〇(ㄛ)

丸

(ㄛ) wan

切

剋

wan

曾

(ㄛ)

甘

(ㄛ) am

切

藍

lam

右廣韻の反切は、一等字の直聲りるを示すこと、能く韻鏡に於て、我方にても、一等字には、ハウ、トウ、リウ、カイ、ワエ、ラムの如く、直聲の假名を用ゐること、言ふまでもなし。

三等韻

次に三等字を観るに、此等には舌頭音の七むれを許さずして、舌上音の七むれに其位を占む。之に據りて、韻字の方も、反切の音和正法に従へば、拗聲とらざるべからず。

陟

𪛗(ㄛ)

隆

(ㄛ) lung

切

中

lung

女 鄰 (n) 切 級 11m

女鄰切の鄰の字は我音にては直拗判じ難けれど、鄰は力珍切なるを見れば音字の力の拗聲なるより推して、歸字としては、拗聲なりと察し得べし。然りとせば、女鄰切の歸字の級は、尚更に拗聲なりと悟り得べし。

齒音にては三等字に屬する音は、齒頭音の *da* *da* *da* と許さずして、正齒音の *da* *da* *da* となり。此等の字の反切の説明は、全く台音に同じ。

章	魚	諸
<i>da</i> (ang)	<i>da</i> (ang)	<i>da</i>
市	羊	常
<i>da</i> (i)	<i>da</i> (ang)	<i>da</i> (ang)
	切	切

市羊切はいはゆる憑切即ち憑音にして、羊は四等字なれど、市の三等字に導かれて、歸字の常は三等韻と爲り、拗聲と屬るなり。

禪母の冬は三等專屬にして、二等に出づること無し。是れ祁母冬の一等に現はれざるが如く、二等の力の強き韻に接すること能はざるに由り

てりるべし、牀母の^ㄌは缺位する場合多し。是れ今の蘇州音にて見るが如く、牀禪の二母濁音相近く、大方は禪母の方にて、事足りたるものと察すべし。

唇音に就いて考ふるに、反切の音字には三等字を用ゐるを全別と爲すこと、舌音濁音に同じ此音に屬する三等字も初聲なること、聊か具證を示すべし。

筆

ㄌ(ㄌ)

陵

ㄌ(ㄌ)ong

切

冰

ㄌ(ㄌ)ong

三字同等なるが故、甘和正法に従ふときは、其中の一宇初聲りれば、他も初聲りるべし。韻字陵は^ㄌong(リヨウ)歸字冰は^ㄌong(ヒヨウ)の初聲なり。故、音字筆も^ㄌong(ヒヨウ)の初聲りるべきこと自然なり。筆は鄙密切り。而して鄙も密も筆も共に三等字なり。三等初聲相通すべく、分けず筆と密とは同韻なれば、筆既に初聲りれば、密も是に従つて初聲となるべく、鄙も亦是に従ふこととなるべし。此の如く三等字の中初聲

ある者あるときは、之を反切に用ぬ。相違ひて、他の同等字に及ぼし得べし。反切に正法よりざる者あるときは、例外と爲ることあれど、多数に由りて誤むるときは、過誤無かるべし。

重唇音の *ん* *ん* *m* は拗聲に變じて、響の弱きの *ん* の如き韻に接するときは、其力を保つこと能はずして、輕唇音の *f* *f* *m* と爲ること常なり。其中 *m* のみは、第一、第三十七の兩轉に於いて見るが如く、原音を維持することあり。唇音の拗聲は、好まれざる所ありたるものと見え、文即にても早くより之を直聲に移しにるのみならず、其韻の聲をも變せしめたる形迹あり。

方 *f* (*ang*)

戎 *f* (*ang*)

切

風

f (*ang*)

方 *f* と戎の *f* 相摩し、*f* *f* の聲とよれるを轉じてと呼ぶ。

f (*ang*)

孚

f (*u*)

表

f (*u*) *u* (*en*)

切

翻

f (*u*) *u* (*en*)

京の *quern* の *quern* と爲るを見れば *quern* は *quern* と爲るを

轉じて *fian* と呼ぶ *fian* は *fian* なり。

右は和音の轉化とのみならず、官話の記法も即ち是にして風

は *lung*, 翻は *fian* なり。

反切の音字の直聲とること時には具例無きに非されど、此等位にては

韻字拗聲する以上は、歸字の拗聲するべきこと、勤かすべからず。

半舌音の三等韻も、拗聲するべきこと疑ふ可からず。

力 *(心)* 舉 *(心)* 切 *(心)* 呂 *(心)*

半齒音は三等專屬の拗音なり、此音の下に在る三等韻の拗聲するべき

こと論を要せず。

牙音喉音には字母に輕重の別無しと雖も、反切の音字には他と同じく

三等字を用ゐるを定則と爲すを見れば、此等の字も亦拗聲するべきを

證す。

居 *ke(ɔ)*

陵 *(l)ing*

切

兢 *keing*

其 *q(ɛ)*

立 *(l)ip*

切

及 *gap*

央 *O(ang)*

居 *(k)ɔ*

切

於 *o*

有

q(iu)

乾

(q)en

切

馮

yeen

石の中我音のみに由れば及乃字馮の字の直拗尚疑あるべけれど、立

は力入切乾は渠焉切なるを見れば其立有乾兩反切の韻字は共に拗

聲なるべきこと論無く其聲は歸字に及ぶことゝ知るべし。

運母は出氣性なりは拗聲にして力の稍弱き三等韻に伴ふこと能は

るか故此等位に現はるゝことなし。

我漢音吳音には三等字に直聲の假名を附することあり其例の中漢吳

兩音直拗相反することあるは奇なりと謂ふべし。

漢音

吳音

漢音

吳音

強

キヤウ

ガウ

與

キョウ

コウ

コ

ロ リヨ

ロ

貞 テイ

チヤウ

城 セイ

ジャウ

同 シウ

シユ

一

合轉の三等韻には轉聲の説明を要すべきものあり。反切の音韻兩拗聲相摩し、合口音のハ其間に挟まるときは、其ハは拗聲の音の後、或ハ拗聲ハ韻の前に置くべし。

巨 巨 (10)

頁 頁 (11) *güen*

切

權

güen

güen は *güen* に近き聲と爲り、官語の *keuen* と相似たり。漢音のク

マは稍之と遠し。蘇州音の *güen* は吳音カゴマに近し。我古音にて源氏をグエンジと記せるも、此類の音よりしと知るべし。

許 許 (12)

漿 漿 (13) *güeng*

切

兄

güeng

güeng は *güeng* と爲り、其聲官語の *güeng*、蘇州音の *güeng* と稍

近く、漢音のケイ、吳音のキヤウと遠し。

昌 *ts'ang*

信

ts'ium

切

春

ts'ium

ts'ium は *ts'ium* と爲り、官話の *chium*、漢吳兩音の *ts'iu* 又は之に近く、

蘇州音の *chien* は稍遠し。

於 *O (o)*

非

(f) u

切

威

u 又は *ui*

ui は *ui* と爲りて、漢吳兩音の *ui*、官話の *ui* と其聲相通ふ。蘇州音

は *ui* より、皆本來は拗聲の在りたるものなるべし。合轉の三等韻

にては、折々拗聲を失ふ者ありと知るべし。

以上擧げ來れる廣韻の反切は、韻鏡の三等拗聲の説を維持せしむる、堅

固なる支柱と爲るべし。

二等韻

二等韻は直聲の一等韻と、拗聲の三等韻との間に位し、其所屬の字に、直
拗何れの聲なるべきか、疑問に屬する者多し。此等韻は元來拗聲りるを、
母音の響の強さに由り、其拗聲を破りて、直聲に轉ずる傾向を生ぜしめ

たるものなるべし、現に漢音にては、二等字を直聲に響かすことを以て定則と爲す。韻鏡にては此等韻拗聲なるべしと信ずと雖も、其拗聲の性質、三等韻とは同じからざるが如し。廣韻の反切を見るに、音字は、同等字のみに非ずして、他等の字混用の例多し。是れ一等韻、二等韻と、大に異なる所なり。

舌音の二等字につき、其反切と比するに、音字は既して三等字にして、拗聲りければ、隨つて歸字の拗聲りるべきこと、自然の結果あるべし。左に異例なる例二三を出さずべし。

陟 *t(ok)* 草 *(o)ak* 切 謫 *tak*

謫は漢音タク、吳音テヤク、官話 *tæk*、蘇州音 *tsak*。

場 *t(ang)* 伯 *(p)ak* 切 宅 *tsak*

宅は漢音タク、吳音テヤク、官話 *tæk*、蘇州音 *tsak*。

宅 *t(ak)* 耕 *(k)ang* 切 橙 *tsang*

澄は漢音タウ、吳音ヂャウ、官話 *tsang*、蘇州音 *tsang*。

右は廣韻拗聲にて、吳音之に従ひ、漢音は直聲の舌音の假名を用ゐ、官話と蘇州音とは、直聲の齒音に移るを見れば、此諸字の拗聲に、落ち着かざる所ありたるものなるべし。

都 *to*

教 *(to) sin*

切

單 *tsau*

單は漢音タウ、吳音ヂャウ、官話 *tsau*、蘇州音 *tsau*。

右廣韻の反切は、音字舌頭音にして、歸字舌上音と爲る、即ち通韻類隔にして、反切の正法に非ず。韻字の教と、漢音の如くカウと讀めば、單はタウと爲れど、然るときは一等字と爲るべし。この去聲の字に對する、平聲の咽は涉交切、上聲の獠は張紋切、若しは、單は拗聲するべきこと疑無し。吳音と官話とに之に従ひ、漢音は舌頭音、蘇州音は齒頭音にて直聲なり。次に齒音に屬する二等字に就きて、考察を下すべし。内轉に屬する諸韻は齒音にのみ二等字と備ふる特徴あり、而して其反切を亂すに、一般に

音字は二等字にして韻字は三等字なる、韻字歸字其等を異にする、いはゆる憑切にして即ち憑音なり。按ずるに齒音には他音と異なり、摩撮力の強き者ありて、其一類三等韻と結びて、同等の他の者と異なる響を生じたるに由り、之を分ちて二等に位せしめたるに非ざるか。然る故にや、音韻の結合稍緩く、時に直聲に變ずる傾向あるを見るなり。二等字、三等字、官話にては、大方は同形なれど、中には母音の記法を異にせる者あり。二等字瑟色は *del* と記し、之に對する三等字失識は *shik* と記するが如し。韻字の三等字なる以上は、歸字の拗聲なるべきこと、自然の結果なりと雖も、二等字は三等字と異なる聲あるものと見え、假名及び羅馬字の寫し方、別様にして、屢々直聲を以て之を表はすことあり。

所	追	表
す(0)	(t) uic	Suic
切	切	
楚	居	初
ts(0)	(k) o	tsio
切	切	
士	尤	愁
ds(0)	(y) iic	dsuic
切	切	

所
ら(の)

祐
(y) in

刈

瘦

sin

右は何れも音字二等、韻字三等の反切なり。

袁は漢吳兩音の假名スイなり、或は追のチエイとツイと記するが如く、本音シエイの耳障となりて、殊に直聲に寫したるものか、此字官話 *shuan*, 廣東音 *shuen*, 朝鮮音(全) *dot* 又(全) *che* なり。

初は官話蘇州音にては直聲 *chi*, 同類の所は *chi*。助は官話 *chi*, 蘇州音 *chi* と記す。我古書の假名に、所を以、助を以て用ゐるも、蓋し據る所ありしなるべし。我音にて初を拗聲にてシヨと呼び、其上聲に當る蹠を直聲にてソと唱へ、所をシヨと呼び、其平聲に當る蹠、又其上聲に當る蹠とソと唱ふるは、只習慣法と言ふのみならん。朝鮮音にては初疑は(全) *chi*, 助は(全) *chi* にては拗聲、蹠、所は(全) *chi* にして直聲なり。然は漢音シウ、吳音ジユにて、其聲廣韻の反切に遠からずと雖も、官話にては直聲にて *chi* と記す。

瘦は反切の歸字の聲の如く、シエウとすべきに、常にソウと記するは俗讀あるべきか、或は後世の轉音あるべきか、官話にて之を「鷄」すを見れば、兩者其間に聯絡あるが如く思はる。蘇州音にては「鷄」の關係鮮音にては「今」にて、共に直聲なり。尤、唇省の韻の *ek, ek, tie* の關係は我音を以て擬し難し。

此外庚韻にては、拗聲あるべき二等字にして、官話にて弱と *iek, 数と* *iek* を *iek*, 弱と *iek*, 色を *iek* と記するが如く、直聲にて、寫すことあり。我音にては、弱数の音とスウと記するは、シエウと言ふは、別に讀み難し。聲にも非ざれば、殊に拗聲を嫌ひ、直聲に移したるに非ざるなり。庚米音にては、二等字に拗聲を用ゐるを常とす。初と *iek*, 助と *ek*, 所と *ek*, 始と *ek*, 瘦と *ek*, 弱と *ek*, 數と *ek*, 黃と *ek*, 葉と *ek*, 色と *ek*, 白と *ek* 等が如し。

例 *ts(oh)*

羊 *(y)ang*

切

莊 *tsang*

莊は漢音サウ、吳音シャウ、官話 *shuang*、蘇州音 *shlong*、朝鮮音 (ㅈ) *chayang*。
 右の如く廣韻の反切は歸字の拗聲なるを示し、漢音獨り直聲にて、他は皆廣韻に従ふ。

初 *sh(0)* 力 *(0)sh* 切 測 *sh(0)*

測は漢音シヨク、吳音シキ、官話、蘇州音 *tsiek*、朝鮮音 (ㅈ) *chick* なり。此字の原音拗聲なるべきこと論無し。然るに常に直聲にてソクと呼ぶは、俗讀りるか、或は又官話、蘇州音に類する轉音りるか。

鋤 *sh(0)* 弓 *(0)shing* 切 崇 *sh(0)ung*

崇は漢音シエウ、吳音ジユ、官話 *tsung*、蘇州音 *shung*、朝鮮音 (ㅈ) *chung* なり。此字又直聲にスウ、ソウと呼ぶことあり。俗讀りるか、或は又官話、蘇州音に類するものか。

右の諸例、何れも、二等韻は三等韻と異なりて、直聲に轉せんとする傾向あるを示す。

より内轉より移りて、外轉の齒音二等韻の性質を課るべし。

例

si(oh)

基

(h)ang

切

爭

tsang

單日漢音、サウ、吳音シヤウ、官話、蘇州音 tang, 廣東音 tsang, 朝鮮音(司)

tsang にして、廣韻、吳音、廣東音、朝鮮音、日切聲、漢音、官話、蘇州音、日直聲

なり。

所

ts(oh)

間

(h)an

切

山

tsan

山日漢音、サ又、吳音ヤ又、官話、廣東音 shan, 蘇州音、廈門音、朝鮮音(ハ)

tsan にして、廣韻、吳音、官話、廣東音、日切聲、蘇州音、廈門音、朝鮮音、日直聲

なり。吳音のセメ日切聲シヤメの轉なるべし。

士

ts(oh)

咸

(h)an

切

護

tsan

護日漢音、サム、吳音、サム、官話、shian, 廣東音、朝鮮音(替) shian, 蘇州音 tsan

にして、廣韻、官話、廣東音、朝鮮音、日切聲、漢音、吳音、蘇州音、日直聲なり。

楚

ts(oh)

江

(h)ang

切

楚

tsang

慈は漢音サウ、吳音ソウ、官話 *chiang*, 蘇州音 *chiang*, 朝鮮音にては(許)
chiang にして、漢吳兩音直聲するは、他と協はす。

新 (心) 交 (心) 切 梢 *iao*

猶は漢音サウ、吳音セウ、官話 *shau*, 蘇州音 *au*, 朝鮮音(企) *sho* にして、
 吳音はシヤウの轉りるべし。漢音と蘇州音とは直聲にして他と協は

す。

右の如く外轉の諸韻にても、齒音の二等字には廣韻の反切に、音字に二
 等字を用ゐること、内轉の例に同じ。但し韻字には二等字を用ゐ、内轉の

如く、三等字を用ゐること無し。
 次に唇音、半舌音の下に位する、二等字を檢すべし。

伯 (伯) 加 (加) 切 巴 *pa*

巴は漢音は、吳音へ、官話、蘇州音、朝鮮音(巴) *pa* にして、廣韻の拗聲に従
 上者無きか如し。吳音と官話とは拗聲の轉りるべし。吳音のへはヒヤ

の轉、官話の *pa* は *pie* の轉とるべし、同韻の如く官話にては *pie* に作る。

薄 *ba(ate)* 炭 *le(ang)* 切 *lang* 彭

彭は漢音ハツ、吳音ロツ、官話 *pang*、蘇州音 *lang*、朝鮮音(四) *pang* にて、廣韻の拗聲、吳音、朝鮮音之に従ふ。

力 *l(ste)* 閑 *(O)an* 切 *lan* 瀾 *lan*

瀾は漢音ウメ、吳音レメ、官話 *lien*、蘇州音、朝鮮音(三) *lan* にて、漢音と蘇州音、朝鮮音とは直聲とれど、他は拗聲なり。吳音のレメ、リメ、の轉とるべし、半舌音と、唇音の如く、拗聲を嫌ひて、直聲に移すことあり。

右三例の如く、反切の韻字は二等字とれど、音字の等位一定とらず。

二等の唇音は重唇音のみにして、力の弱き輕唇音を許さず。

居 *ke(2)* 肴 *(O)au* 切 *ke* 交 *ke*

右は集韻の反切なり。廣韻は吉肴切にして、音字は直聲なり。文は漢音
 カウ、吳音ケウ、官話 *keian*, 蘇州音 *kean*, 朝鮮音(三) *keyo* にして、漢音、蘇州
 音の外は拗聲なり。吳音ケウはキヤツの轉寫るべし。

丘 *ke(iu)* 皆 *(ke)ai* 切 指 *keai*

右は集韻の反切なり。廣韻は口皆切にして、音字は直聲なり。指は漢吳
 兩音カイ、官話 *keiai*, 蘇州音 *keia*, 朝鮮音(二) *keai* にして、我音の外は拗
 聲なり。

牛 *ng(iu)* 加 *(ke)ai* 切 牙 *nga*

右は集韻の反切なり。廣韻は五加切にして、音字は直聲なり。牙は漢音
 カ吳音ケ、官話 *ga*, 蘇州音 *nga*, 朝鮮音(外) *ga* なり。官話と朝鮮音とは牙
 喉往來の轉音なり。漢音、蘇州音、朝鮮音の外は拗聲なり。

乙 *o(iu)* 甲 *(ke)ai* 切 鴨 *ai*

鴨漢音 *af*, 吳音 *af*, 官話 *ga*, 蘇州音 *ak*, 朝鮮音(外) *af* たり。吳音 *af*

フはヤフの轉るべし。吳音と官話とは集韻に従ひて、拗聲なり。庚韻は烏甲切にして、音字は直聲なり。

許 た(ㄊㄚ) 庚 (k)ang 切 亨 ㄒㄩㄥ

亨は漢音カㄘ、吳音キヤㄘ、官話 *kiang* 蘇州音 *kiang*、朝鮮音 (ㄱ) *kiang* にして、漢音の外は拗聲なり。

下 〇(ㄛ) 江 (ㄐ)ang 切 降 ㄐㄩㄥ

降は漢音リㄘ、吳音ゴㄘ、官話 *kiang*、蘇州音 *ang*、朝鮮音 (ㄱ) *kiang* にて

官話獨り廣韻に協ひて、拗聲なり。

右諸例に引きたる反切も、音字の等位は一定せず。韻字は常に二等字なり。音字直聲、韻字拗聲の憑韻反切は、廣韻牙音の下具例最も多く、喉音唇音の下之に次ぐ。

聲母は一等に現はれず、又二等にも出づること稀なり。是れ一等、二等の如き強き韻に伴ふ、濁牙音を嫌ひたるに由ることなるべし。二等には、聲

二十二轉に、雄第三十六轉に、趨の字ありて、僅かに合口の音に誘はれて、
現はるゝものゝ如し。

喻母は一等に現はるゝこと其例少く、二等には絶無なり。是れ喻母は拗
聲の如く聞こゆる傾向ありて、一等の強き韻と結合することの難きは
故りるべく、又二等に在りては、喻母のゝと拗聲の強き韻と重なるを耳
障と爲したることよりるべし。其の一等に現はるゝ者は、第十三轉の伯と、
第十四轉の侑とのみなり。

普通の場合にても、拗聲を失はんとする二等韻は、合轉の諸韻にては、合
口の音に隠れて、愈其傾向を表はすに至るを見らるなり。

下 〇 (a) 快 (k) uai 切 話 uai a i uai

話は漢音クワイ、吳音ク又、官話 *kuwa*, 蘇州音 *kwai*, 朝鮮音 (訓) *kwai* なり。

呼 〇 (o) 瓜 (k) ua 切 花 hua

花は漢音クワ、吳音ク又、官話 *kuwa*, 蘇州音 *kwua*, 朝鮮音 (訓) *kwua* なり。

古 *ka(1)*

患 *(O)uan*

切

慣

kuuan

慣は漢音クツ又吳音ケヌ(リツヌ)官話蘇州音朝鮮音(患) *kuuan* なり

以上諸音に徴して、二等韻の性質を研究し來れば、直聲を保ち、或は直聲

に轉せんとする傾向ある者多きに拍日らす其原音は拗聲なること動

かす可からず。内轉の一等韻は、三等韻の變形の如く見ゆる所ありと、外

轉の二等韻には、同様の事無く、更に一等韻と相對して、直拗の關係を明

確に表はす者あり。

一等

直聲

二等

拗聲

咍

ai

皆

ai

寒

ai

剛

ai

豪

ai

父

ai

覃

am

咸

am

直聲を二等韻に用ゐる漢音にては、此別辨し難し、漢音は今の南方の漳

州音りと縁故を有するが如く見え、韻鏡、廣韻の音とは其系統を果にするものゝ如し。

四等韻

四等韻は一等韻に類し、其所屬の字の反切の音字は直聲なるを本則と爲し、一等字と共通の者を用ゐること多し。是れ先づ歸字の直聲なるを示すと雖も、其韻字に至りては、往々三等字を用ゐて、歸字は憑音と爲り、疑問を起すこと無きに非ず。時に音字韻字共に拗聲りることあるは、或は韻鏡と廣韻と一致せずして、其聲を異にせしむるに由ることあるべし。先づ四等韻の直聲なるを韻鏡の本則として、之を廣韻に徴し、更に他の諸音と比較すべし。

舌音は舌上音と許さずして、舌頭音其位を占む。

審 t(ang)

經 (h)eng

切

丁 teng

止 t(æ)

祭 (h)ian

切

添 t(æ)m

止

杜	た	た(0)	吳	(0) じ	切	題	だい
---	---	------	---	-------	---	---	----

収	しゅ	しゅ(0)	平	(た) じゅ	切	康	けい
---	----	-------	---	--------	---	---	----

右音字は一等字、韻字は四等字にして、音字を標準とすると、は歸字の随つて直聲なる可べきを察し得べし。韻字及び歸字には、収音にて直聲に直聲と認め得る者多し。他音の下にても同様なり。

齒音は齒頭音にして、正齒音と許さず。尤に直拗、訕れ易き、數例を擧ぐ。

邱	しゅ	しゅ(0)	邱	(た) じゅ	切	差	さ
---	----	-------	---	--------	---	---	---

嗟は漢音シヤ、吳音リ、官話 *tsa*, 蘇州音 *tsa*, 廣東音 *tsa*, 朝鮮音 (文)

tsa にして、漢音と朝鮮音と日拗聲、他は直聲なり。

七	ち	ち(0)	羊	(し) じやう	切	鋤	ちう
---	---	------	---	---------	---	---	----

鋤は漢音シヤ、吳音リ、官話 *tsu*, 蘇州音 *tsu*, 廣東音 *tsu*, 朝鮮音 (文)

tsu にして、漢音と朝鮮音と日拗聲、吳音は直聲、官話、蘇州音は具別

判明りらず、廣東音は直聲なるが如し。

外

chick

鳥 (to)u

切

焦

chick

焦は漢音セウ、吳音ゼウ、官話 *seac*、蘇州音 *saac*、廣東音 *saac*、朝鮮音 *saac*、
 音(大) *saac* にして、漢吳兩音は直拗到に難きも、朝鮮音は、拗聲、官話、蘇州
 音、廣東音は拗聲りるが如し。

息

s(ok)

弓

(h)ang

切

富

ang

右は音字直、韻字拗の憑音なり。富は漢音シユウ、吳音シユ、官話 *ang*、

蘇州音

ang

朝鮮音(音)

ang

にして、漢吳兩音と朝鮮音とは拗聲、他

は直聲なり。此字常にスウと呼ぶにシユウの轉じたる和音に非ずし

て、據處あるりるべし。此音廣韻に協ふ。

富のハ聲は肅にして、其反切は尤の如し。

息

s(ok)

逐

(d)uck

切

肅

uck

是亦音字直、韻字拗にして、歸字は直聲なりと、拗聲に傾く所あるが如

し。肅は漢吳兩音シユウ、官話 *uck*、蘇州音 *uck*、朝鮮音(音) *uck*、

鮮 ㄹ(ung) 容 (y) ong

切

必 ㄹ(ung)

松は漢音シヨウ吳音ジエ官話 *lung*、蘇州音 *lung*、朝鮮音(音) *lung* にし
漢音吳音朝鮮音は切聲他は直聲なり松江をブンヨウなどと呼
習はせにるか如きも松にブング又バングの音ありたるを示す。

松の入聲は讀まり。讀は漢音シヨク吳音ソク官話 *sek*、蘇州音 *sek*、朝
鮮音(音) *sek* となり。同類の縫は漢音シヨク吳音シエ官話 *lung*、蘇州音

lung、朝鮮音(音) *lung* にして其入聲の足は漢音シヨク吳音ソク官話
sek、蘇州音 *sek*、朝鮮音(音) *sek* なり。入聲の吳音は官話蘇州音と共に

能く其の直聲なることを證す。

唇音も輕唇音は此等に下ること能はざるを法とす。反切の音字は通例
一等と共通なる重唇音なり。韻字は時には三等字を用ゐることあれど
歸字は直聲なるを定則とす。

必 ㄹ(ek)

移 (y) ek

切

果

pek

彌 *m(i)*

鄰 *(l)in*

切

民 *min*

右二例は一は四等一は三等の韻字を用ゐたる者を出した。

牙音喉音の四等字は具反切の韻字は通例四等字けれど音字には一等四等の字ありて一樣ならず。一般に音字直聲するとき、歸字の直聲するべきこと自然なり。

古

ge(o)

鹽

(l)eng

切

經

keeng

五

ng(o)

聊

(l)éu

切

亮

ngai

胡

o'(o)

田

(d)in

切

賢

in

音字拗聲るときは四等韻の響の弱さに由り之に伴ひて拗聲の力の脱け落つるものと見て説明すべき者あり。

居

ge(o)

隄

(i)ui

切

規

ui

去

ge(o)

盈

(y)eng

切

輕

hieng

喜

ke(i)

夷

(y)i

切

映

hi

音字の直聲なりと、拗聲なりとに由り、其歸字の聲に聊か異りる所あるべしと信ずれど、假名又羅馬字にて之を表はし難し。
音字四等韻字三等歸字四等の場合は、前例と同様の結果と見做すべし。
かかる場合には、音字を既定の直聲と假定せざるを得ず。

息

o (ste)

鄰

(d)in

切

年

nen

以

g (i)

成

(2)eng

切

盈

yen

音字三等韻字三等なりは、音和正法の反切にて、歸字も無論三等なりは、
けれど之を四等に位せしむるは、廣韻と韻鏡と一致せざるものと見做すべし。

居

ke (i)

正

(d)ong

切

勁

jeing

於

o (i)

眞

(d)in

切

困

in

勁は玉篇にては吉聖切、因は集韻にては伊眞切にして、韻字は拗聲なりと、
音字は直聲なり。韻鏡にては兩字四等字なりは勁は *keing*、因は *in* と

るべし。

下

O(a)

珍

(t)ise

切

廣

ise

磧は廣韻眞の韻に入る。下は二等字、珍は三等字なれば、二等三等の何れかに入るべき格なり。二等は臻の韻なれば、三等に收むべきこと、爲るなり。然るに韻鏡にては、三等には匣母の字無く、第十七轉匣母の下、磧は四等に位を占む。是れ明かに廣韻の反切と、韻鏡の等位と相合はざる例なり。集韻の反切は廣韻と同じ、玉篇には此反切無し。

此字又義を異にし、廣韻に胡田切、玉篇に下疎切とありて、何れも賢の音と爲る。田、疎は賢と共に韻鏡にては四等に位し、廣韻と韻鏡と能く相一致す。因つて、磧は第十七、第二十一の兩轉に分れ屬して、音を異にすと雖も本來は直聲の四等字なるを察し得べし。

四等韻の性質につきたの諸項に注意を要す。

一、現代支那音にては、齒音は粘りの強き所ありて、か、其本來の母音なる

その具力と失ひて以に變はり、或は全く脱け落ち入るも、子音は其儘にて其音を留むることあり、分けて四等韻の輕母音に對して、他音の多く存在し得る場合にも、其音を表はすを常しす。蘇州音にて茲子を以、此次をひ、疵自をひ、思私をふ、似寺をふ、母音を除き去り、子音のみにて表はすは其例なり。南京官話にては亦同法を用ぬ。茲子自をひ、此次疵をひ、思私似寺をふと無韻にて寫すことあり。

二、韻鏡の合轉に屬する字は、我假名にては、和行の假名を以て表はすことを定則と爲す。然るに第十六轉の銳叡はエイ、第二十二轉の沿鉛縁緣捐薦兗はエヌ、悅閱はエツ、第三十四轉の營顛はエイ、役疫はエキと記するが如く、合轉に屬する字を、古來也行の假名を以て寫せるは、久しく學者の惑を起さしめ采れる所なり。其理由は他に非ず。四等韻には拗聲の伴ひ能はざるが如く、合口の發聲も此韻と結ひては勢弱く、上の母に聲されて、下の母の聲のみ耳立ちて聞こえ、遂に開口力也行

假名にて寫しにるものりるべし。之に反し、三等韻にては、拗聲能く合口の發聲と結びて、確かりる合口音を生じたるなり。故に三等の和行假名りるべきこと疑無し。平居氏の假字用格と祖とせら、從來の假名道に、三等字の榮永の類までを、エイの方に移しにる非なりと謂ふべし。榮永は廣東音にて *sing* と呼ぶと見れば、合口音りること爭ふべからず。

三、開轉に屬する諸韻にては、喻母所屬の字獨立して四等に現はれ、合轉に屬する諸韻にては、或は三等或は三四兩等に現はるゝ例多し。開轉にては、喻母のハ、三等の拗聲の韻と、相重なるが如くきこゆるを避け、四等韻と結びて直聲と爲るなり。されど又合口の發聲と伴ふときは、拗聲の韻と結びて支障無く、合轉にて三等韻と伴ふも、別に聞き苦しからずして、其位置を保つことと得るなり。左に二例を擧げて之を示すべし。

内轉第六開

三等

四等

六ハ

内轉第七合

三等

四等

位

gwen

道

gwen

右の場合にては、我假名にては、三等と井、四等とエイと書くを常とす。

官話にては共にイを落として *gwen* なり。

外轉第二十一開

三等

四等

〇

延

gwen

外轉第二十二合

三等

表

gwen

沿

gwen

右の場合には、我假名にては三等とエ又、四等とエ又と記す。官話にては

共に *gwen* なり。

因に記す。第八轉喻母三等、四等の記法諸本一致せず。上聲三等に位する

字と或は以と爲し或は今に作る。享祿本は以七音略韻鑑に矣と各三等に置き、四等と空位と爲す。諸鈔大成「三等と空位と爲し、四等に以て置く、是れ従ふべし。本來以矣同音にして、以は四等字なり。第十七轉、喻母入聲三等に、享祿本には颯の字あれど、七音略韻鑑に從ひて、之を第十八轉に移す。明かに例外と爲る者は、開轉、喻母三等字にして、第二十轉、平聲馮、第二十五轉、平聲鴟、第三十八轉、去聲頰、入聲煜、第三十九轉、平聲炎、入聲の暉の六字のみ。第三十七轉、喻母三等にも字あれど、此轉に就いては、同じく、喻母三等に字ある第一轉と共に後に論ず。

四、前述の喻母と共に、他音を離れて、齒音のみ、四等に現はるゝことあり。是れ内轉の第一類に屬する者なり。四等の弱母音に對しては、喉音の喻母と齒音とのみ其の消え去らんとする聲を、引き留むる力があるものに見ゆ。注意第一項にて説きたるが如く、現今の支那音にて、母音の脱け落ちて、尚齒音の具聲を留むるは、齒音に特性あるに由るべく、又

此處音の殊に、内轉の二等に現はるゝも亦是に基くこととるべし。

五、匣母は第十七轉の破の外、内轉の四等韻に伴ふこと能はず。是れ出氣性の音の力の弱き韻と結ぶこと能はずに由ることとるべし。匣母は拗聲の三等韻を嫌へど、外轉の響の稍強き四等韻に伴ひては現はるゝことを得べし。

六、半舌音は内轉の四等韻に伴ふこと主つて稀なり。第三十七轉の鏐の如きは殆ど例外と見るべく、總じて、その如き軟かなる音は、其勢消えて、響の弱き韻と結合すること能はず。其響の稍強き外轉の四等韻に接するときは現はれ出づることあり。連の *len*、禮の *lee*、靈の *leŋ*、聊の *lee*、療の *leŋ* の如し。

七、邪母は四等專屬の音にして、弱き韻に適合する音なりと言ふ外説明無し。

以上述べ來りし所に由り、一等は直聲、二等は拗聲、三等は直聲、四等は直聲、
を知るべし。二等は韻の力強く、動もすれば拗聲を破りて、直聲に轉せし
むる傾向ありて、拗聲の明かりる言上音、正齒音所屬の字にも、韻鏡以外
の音にては直聲ある者少からず。三等は全く拗聲にて、疑と挾むべき餘
地無し。四等は韻の力弱く、二等と反對の理由にて、拗聲之に伴ふこと能
はずして消え落ち、直聲の形を保つに至れり。故に四等字には韻鏡以外
には、拗聲字あるも、敢て怪しむに足らず。

舌齒の兩音に輕重の名あるは他無し。其の本來の重音、二等、三等の拗聲
の韻に接し、之に急かれて軟化し、輕音に轉じたるに由りて、別と設けたる
なり。唇音の輕重は之と其性質同じからざる所あり、其は別に説明すべし。
牙音、喉音に於いても、二等、三等に在りては拗聲に轉じれば、其韻と相接
するるとき、他に比すれば、稍圓滑な、缺き、落ち着かざる所ありたるが如し。
是れ輕重の別字母を作らざりし理由なるべし。

たに一見明瞭ならしむるがため、字母と等韻との關係を再記す。

一、輕唇音非敷奉微は、三等專屬の拗聲字母にして、二等に上ることなし。

一、聲母は一等に現はれず、二等にも出づる例至つて稀なり。

一、邪母は四等專屬にして、他等に出づることなし。

一、牀母は三等にては缺位の場合多し。

一、禪母は三等專屬にして、他等に出づることなし。

一、匣母は三等に現はるゝことなく、四等には比較的強き韻に伴ふとき

は其位を占む。

一、喻母は一等に現はるゝこと其例少く、二等には絶えてこれなく、三等

には開轉を避けて、合轉の諸韻に伴ひ、四等には開合兩轉に現はれ、特

に開轉にては、孤立の姿を取る場合多し。

一、來母は四等にては比較的強き韻に伴ふとき其形を表はす。

一、日母は三等專屬にして、他等に出づることなし。

第五章 二百六韻考

内轉第一開

東	<i>oung</i>	オウ
	<i>iung</i>	イェウ
	<i>iuung</i>	イユウ
	<i>iuung</i>	イウ
	<i>'oung</i>	オウ
董		
送	<i>oung'</i>	オウ
	<i>iung'</i>	イェウ
	<i>iuung'</i>	イユウ
	<i>iuung'</i>	イウ
屋	<i>ouk</i>	オク
	<i>iuk</i>	イェク
	<i>iuk</i>	イェク
	<i>iuk</i>	イウク

(*iung*) 一音が如し。古音にてはウウのウを短縮し空を久通をツと呼ぶ

即ち尾音のウ (*iung*) を落としたるなり。詳かに此轉の韻の性質を考ふる

ときは、一等韻をオといとの中間音と爲して、之を *oung* に作り、二等以下

の韻をイといとの中間音と爲して、之を *iung* に作ることを適當なるべし。

ハ聲は他聲の尾音 *iy* のに變はりたるのみければ、韻を説明するときは

略して記せざることを、凡右は喉韻に就いて言へるなり。舌韻の諸尾の

一等の *oung* は漢音にてはオ

ウ (*oung*)、吳音にてはウウ

(*iung*) に作る。宜は漢音ウウ

(*oung*)、吳音クウ (*kuung*)、通

は漢音トウ (*long*)、吳音ツウ

冬	ong	オウ
鍾	ong	ヨウ
腫	ong	ヨウ
宋	ong'	オウ
用	ong'	ヨウ
沃	ok	オク
燭	ok	ヨク

六朝中期の古韻にては第一
第二兩轉の韻に *long* の聲あり

りて、同用なりし時ありし
觀る。古音にて冬を以て嚴と
と呼びたるが如き假名を用

法のり、即ち此聲に近し。兩轉の韻を宮語に合し、蘇州音に合し。

語は吳音、蘇州音に漢音の記法に似たるも奇なりと謂ふべし。朝鮮音は

第一轉 ㄉ (ㄉ) ㄘ (ㄘ) ㄙ (ㄙ)
第二轉 ㄋ (ㄋ) ㄗ (ㄗ) ㄛ (ㄛ)

此轉の韻は、眞聲現代音りる官話の
即ち
に近
かり
し
が
如
し

漢音アウ、吳音オウ、何れも是に同じからず。江の韻の陽の韻と相通ずる。

支紙眞の韻所屬の字は、我古音にては、施をせ、宜をゲと呼べるが如く、魏

支	い	イ
	い	イ
	い	イ
紙	い	イ
	い	イ
	い	イ
眞	い	イ
	い	イ
	い	イ

支	い	井
	い	井
	い	井
紙	い	井
	い	井
	い	井
眞	い	井
	い	井
	い	井

内轉第四開

冬江の三韻同用なりしが如し朝鮮音は漢音に類して *ang* たり。

内轉第五合

江	<i>ang</i>	ヤウ
講	<i>ang</i>	ヤウ
絳	<i>ang</i>	ヤウ
覺	<i>ak</i>	ヤク

ことあるは此聲あるに由るなり。漢音アウは廈門音 *ang* に同じく、吳音オウは蘇州音 *ang* に近し。六朝の中期までは詩歌の押韻に徴するに米

音の項には(エ)の聲なりしが如し。易積は去聲の寘の韻より入聲の昔の韻に移れば、エキ、セキの音と爲り、又入聲のユキ、ヘキの音あり。蓋、碎は諸聲字、鑑、臂の聲符と爲るときは、之をして、去聲の寘の韻に屬せしむ。是に由りて、此轉の韻の聲は、エ(イ)を以て表はすと雖も、唐代に於いては、尚と(エ)に近き所ありたるべしと思考す。其の通小所の入聲の韻の尾音は、ん(キ)なるを見れば、此兩轉は喉韻にして、其聲の長かりしもの推斷す。同類の開合兩轉の合の方には開の方の韻の前に、れを附して之を示す。

内轉第六開

脂	い	イ
	い	イ
	い	イ
旨	い	イ
	い	イ
	い	イ
至	い	イ
	い	イ
	い	イ

内轉第七合

脂	い	井
	い	井
	い	井
旨	い	井
	い	井
	い	井
至	い	井
	い	井
	い	井

諸聲字の關係、至の寘、肆の圭、懿の壹、祝の必に於けるが如く、入聲は韻の

韻に入る者多し。此質の二字の如きも、去聲にて付至の韻に入り、入聲にては質の韻に屬す。此兩轉の韻の聲は、心(イ)にして、其入聲の尾音は七(ツ)と爲るを見れば、其の舌韻にて、聲の短かつりしを察し得べし。

合轉の方にて出の *kanie* (スイ) は *kanie* 即ち *kanie* (エツ) 帥の *kanie* (スイ) は *kanie* 即ち *kanie* (エツ) に通ふが如き例あれど、韻の性質は開轉の方の格と異なる所あるに非ず。

内轉第八開

之	い	イ
	い	イ
	い	イ
止	い	イ
	い	イ
	い	イ
志	い	イ
	い	イ
	い	イ

韻に通ふを見れば、尾音は喉韻の危(ク)に屬して韻の聲長かりしと察し得べし。常に獨り入聲のみならず、之、止、志の韻は、登、等、證と蒸、征、證との韻

食直の入聲、職の韻に移り、又諧聲字にては、寺の持、廁の則、意の應、異の翼、試の式、熾の戢、疑の疑に於けるが如き關係にて、此轉の韻の字、入聲の德、職の

に通ひたることあり。微疑の之、魚の兩韻に屬し、齒、耳の止、紐の兩韻に屬するは其例なり。さて此轉の韻を(イ)の聲と爲すとき、食とジ、ヂ、止とヂ、ヂキと吳音と讀みて協へるが如し。されは微疑は官話の如く、*king* (キング) *king* (イंक) と呼ぶには符合すれど、吳音にて之をキヨウ、ゴウ又ギヨウと呼ぶは當らざることにあはるべし。我古音に意を不己と二期とと呼べるが如く、此轉の韻にオの聲ありたるを見る。されは漢音にて食直とシヨク、テヨク、微疑とテヨウ、ギヨウと言ふと相通ふに似たり。意ふに此轉の韻の聲は純粹の(イ)に非ずして、の(エ)、(ウ)に近き所ありたるもの、如し。漢以前の古韻にては、之の韻は尤の韻に通じ、之に屬せし字の一部は、後尤の韻に移り入れり。これ其當時尤の聲自らざりたるを證するに足るべし。現代支那音にては、此轉に屬するを以思をスとウの聲にて響かすを聞く。

唐以後に至り、第四、第五、第六、第七、第八の諸轉の韻、其聲次第に相近つ

南宋の平水韻は、遂に之を併合するに至れり。

内轉第九開

微	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ
尾	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ
未	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ
	<u>い</u>	イ

内轉第十合

微	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井
尾	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井
未	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井
	<u>い</u>	井

我古音にて衣をエ、氣をケと唱へたるが如く此兩轉の韻はエ(エ)に近き聲ありたるものなるべし。相通へる所の入聲は、開轉の韻の方日送合轉の韻の方日物なり。右の入聲の尾音はト(ツ)なると由り、此兩轉は舌韻にして、其聲は短かりりものと推斷することを得べし。微の韻は、欣の韻に通へるより、或は〇(オ)の聲にも近き所ありたるならんかと思はる。祈祈の聲符は斤なり。この斤にはコタの聲あり。又入聲の乞にコツの音あり。オの音の隨れ居りたるを證するに足るべし。又微の韻は文の韻にも通

へり、軍と聲符として、揮、輝等の字の作られたること明かき水は、軍の音の尾音を切りて、キの音と爲りたるは事實なりと、其間に母音の變化行はれ、我音のみにては、到底説明し難し。

誦、弟は去勢の末の韻に屬して *huc* 又 *hic* (フツ) の音なり。兩字入聲の物の韻に入りては、*huc* 又 *hic* (フツ) の音と爲れど、其根本を正すは、開合の兩轉は、其韻の性質に於いて異なり所無し。

諸本廢を右兩轉の去聲の奇韻と爲す。是れ韻の配置の法則に叶はず。七音略韻鑑は之を此兩轉と第十五、第十六の兩轉とに置くこと重複す。前の方には後人の誤記あるべければ、後の兩轉の下に置くを正しとす。

内轉第十一開

魚	ㄩ	ヨ
	ㄩ	ヨ
	ㄩ	オ
語	ㄩ	ヨ
	ㄩ	ヨ
	ㄩ	オ
御	ㄩ	ヨ
	ㄩ	ヨ
	ㄩ	オ

去聲の御の韻に屬する者か字、入聲の御の韻に移り、又諸聲字として、聲符處の御の韻の處の字に入り、又乘の韻

の喉の字に入るを見れば、此轉の喉韻にして、其聲の長かりしを知るべし。其の通へる所の入聲の尾音は友(ㄹ)なり。蘇州音にては友又のを以て此轉の韻の聲を表はす。朝鮮音(ㄹ)はのなり。

内轉第十二合

模	○	ヲ
	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウユ
虞	ㄷ	ウ
	○	ヲ
	ㄷ	ウユ
坑	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウ
慶	○	ヲ
	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウユ
暮	○	ヲ
	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウユ
遇	ㄷ	ウ
	ㄷ	ウユ
	ㄷ	ウ

喉韻なるを知るべし。此轉は極めて輕微なる合轉にして、開合對次の形式上、第十一轉の開轉に對し、合轉の標記としてㄷ又ㄷを附すべき所なり。之を省くも、實際には支障無かるべし。官話にてはㄷを以て之を爲しと常とす。ㄷは支那音にては輕き合口音と爲る。我方にては時に或る道の紛れを避くるが故のには、影母又喻母に、ㄷと記して、合口音と示す。

要あるべし。此轉の韻と、入聲の鐸藥の韻との關係を見るに、古韻にては、此類に〇(オ)の聲ありて、開轉に屬せし者多かりしものなり。朝鮮音にて日一等韻日(〇)〇、他は(〇)〇なること、漢音に同じ。

外轉第十三開

日 旨 齊 海 駭 齊 代 怪 祭 霽 夫	アイ	
	ヤイ	
	エイ	
	エ	
	アイ	
	ヤイ	
	エイ	
	エ	
	アイ	
	ヤイ	
	エイ	
	エ	
云 唇 寄 此		

韻に屬する蔗の字あり。元來日海は直聲の韻なるに、右の二字は拗聲なり。か故、置くに處りくして、空位なる三等に下したるものなるべし。又海の韻に屬する疋の字、日母の拗聲なるに、猶一等に位せり。平聲齊日直聲の四等韻なり。然るに剛韻に屬する糖の字、日母の拗聲なるに、猶四等

宮話、蘇州音に従ひ、日海は一等、二等日、直拗の別相なり。平上の三等は拗聲の格なり。然るに廣韻にては、日の韻に屬する糖の字あり、又海の

位せり。是ハ明かに例外り。此の如きは恐らくは後世の音變化にして、後人の挿入したるものなるべし。

外轉第十四合

仄皆	<i>uái</i> ワイ	齊賄駭		去聲寄此
	<i>uái</i> ウヤイ			
	<i>uái</i> エイ			
	<i>uái</i> エイ			
隊怪祭霽	<i>'uái</i> ワイ			
	<i>'uái</i> ウヤイ			
	<i>uái</i> エイ			
	<i>uái</i> エイ			
夬				
	<i>uái</i> ウヤイ			

二等韻は拗聲の格とれど、我假名にては之を省くを常とす。合轉の二等韻にて拗聲を落とすこと他にも其例多し。乖懷は二等韻の皆に屬する

字とれど拗聲のクワイと記せずして直聲にてクワイと記するが如し。官話にても拗聲を省くこと我假名の如く乖を *kuai*、懷を *huai* と記す。

夬は獨立韻にして、怪とは其性質同じからず。具聲の類似する所あるを以て、第十三、第十四の兩轉の下に、去聲寄韻として配置せられたるなり。

外轉第十五開

佳	佳	uái	ウイ
蟹	蟹	uái	ウイ
泰卦	泰卦	uái	ウイ
		uái	ウイ
祭	祭	uái	ウイ
侵	侵	uái	ウイ

去聲寄此

外轉第十六合

佳	佳	uái	ウイ
蟹	蟹	uái	ウイ
泰卦	泰卦	uái	ウイ
		uái	ウイ
祭	祭	uái	ウイ
廢	廢	uái	ウイ

去聲寄此

佳蟹卦の韻は、古ハ支齊歌灰
 比具上聲、去聲の韻に通ひ七
 者多し。圭卦佳、蛙、鼻、牒、禪
 一又、鈇、叔、一麗、濃、曠、一吳、暖、謨
 一昌、媯、調、一貢、債、一益、澄、の如
 し。支の韻の入聲なる貢、益、付
 昔の韻に移る。外に又脂、微、入
 比具上聲、去聲の韻と通ひ七
 る者あり。此紫、眺、一安、矮、威、能
 の如し。右の關係に就きて考
 すれば、第十三、第十六の兩轉とい
 日、第十三、第十四の兩轉とい
 其系統を異にするを知らべ

し、此別今假名又羅馬字を以て表はし難し。

佳の韻の字は屢々下のイの音を落とすことあり。漢音にて佳をか、釵を
サと言ふが如し。蘇州音にては佳を *kyā* 釵を *chiā* と記する例あり。官話
にては佳は *hiāi*、釵は *chāi* なり。朝鮮音にては佳は (H) *hāi*、釵は (H)

hiāi なり。

去聲の泰の韻は一等に位し、平上の兩聲共に之に對する一等は空位と
り。泰の韻と卦の韻とは直拗相對すれど、韻の系統は同じからず。大の韻
は泰の韻と直拗相協ふ。苦、悟、一、謁、喝、一、貝、敗、一、最、喉は其例にして、上は泰
下は天に屬す。祭も亦平上の兩聲之に對する者無き去聲の韻なり。泰、大
祭は怪とも卦とも同類ならざるが故、本來は他と分れて獨立すべき韻
なりとす。發の韻は古韻にては泰、大、祭と同系に屬す。泰と曷、求と失と鑑
點と、廢と目と、祭と霽と去聲入聲具系統を同じうす。

泰、大の韻所屬の字には、下のイを落とすことあり。泰を父、鑑を古、話をワ

一爲了が如し。

去聲の四等は表に示すが如く合轉にては、エイの假名に依るを去聲と爲せし、喻母の下祭の韻に屬する銳、徹を開口音の如く、エイの假名にて表すは、前に説けるが如く韻の響の弱さに連れ、此の音消えんとして、リの音の耳立ちて聞こえたるに由ることなり。

内轉第十七開

痕 臻 眞	ioɿ	オヌ
	ieɿ	イヌ
	iɿ	イヌ
	ieɿ	イヌ
痕	oɿ	オヌ
軫	ieɿ	イヌ
	ieɿ	イヌ
恨	oɿ	オヌ
震	ieɿ	イヌ
	ieɿ	イヌ
沒 御 質	et	エツ
	et	イツ
	et	イツ
	et	イツ

此轉につき先づ疑問の起るべきは、一等の(エ)の他等力(イ)と相對することなり。當語にて日足る(ieɿ)、痕を(ieɿ)、

想を(ieɿ)と言ひ蘇州音にて日思ふ(ieɿ)、痕を(ieɿ)、痕を(ieɿ)と言ふ。これは一等韻に属する(アヌ)(エヌ)(エヌ)(オヌ)の三聲あり。アヌエヌは後世の轉音なるべし。廣東音にては、他等にても亦(ieɿ)の聲あり。平を(ieɿ)。

人を *yan*, 賓を *pan* と言ふが如し。此轉は内轉なるが故、アヌ、エヌの聲
 に非ざりしこと明かなり。吳音には牙喉兩音の三等韻にオの聲を用ゐ
 る例あり。巾にコヌ、乙にオツカ假名を當つるが如し。是れ一等韻と縁故
 ありしを示すものなり。案ずるに一等韻のオはイに近き響を雜へ居り
 たるものなるべし。故に又エに轉せんとする傾向あり。二等韻は官語に
 テ入聲の瑟櫛を *neh, tsieh* と記して、之に對する三等字失、質の *chick*,
chick と分つ例あるを見れば、二等韻にエに類似の聲の隱れ居るを察す
 べし。三等韻のイヌは我吳音より推して考ふるときは、オヌに類似の聲
 ありたるものゝ如し。四等韻は直聲にてイヌの聲なりしかと思はるる
 所あり。吳音にて三等韻の乙はオツなりと、之に對する四等韻の一はイ
 ツなるを以て、聊か其別を窺ふに足るべし。又那音にては我假名又羅馬
 字の音と、其性質を異にするが故、適當に其別を寫し難し。朝鮮音にては、
 一等は (으) *eu*, (으) *eu*, 二等以下は (으) *eu*, (으) *eu* より、

亮	1. 11071	ア	又
諄	1. 11071	ア	又
溫	1. 11071	ア	又
準	1. 11071	ア	又
恩	1. 11071	ア	又
稔	1. 11071	ア	又
沒	1. 11071	ア	又
術	1. 11071	ア	又

一等韻の官話に就て諸種の誤

法あり、温、widm, 魔、
placation,

坤
一
human
二
記
三
命
四
from

[illegible]

論
+
ben, 門
+
muen
記
了。蘇州音にて、溫鬼
+
wee,
+
kuei, 鬼
+
kuei, 鬼

[illegible]

轉力記法有り。官話の同韻にして母音の記法一致せるのみなり。

州音と共に、開合の記法も統一せず。是は後世の轉音にして、原音にてけ

在る可からざる現象なり、
 然るに其原音にして、
 此の如くなるに近う所

りたるものと悟り置くべし。三等韻の^イ_ハは^エ_オと爲る二と等なり。

春の原音 *haru* の *haru* と偏るが如し。二ハ我音のシエ又に當るなり

鮮音にては溫、坤、敦、專、論、リ(是)ヨ、
聲にて我音に近く、意は(是)ナリ。

て具聲變じ、奔門は(音) *in* の聲なり。

内轉第十九開

欣	<i>in</i> イヌ
隱	<i>in</i> イヌ
焮	<i>in</i> イヌ
迄	<i>it</i> イツ

内轉第二十合

文	<i>in</i> ハヌ
吻	<i>in</i> ハヌ
問	<i>in</i> ハヌ
物	<i>it</i> ハツ

轉に通ひたるを見れば、第十八轉と第二十轉との別は第七轉と第十轉との別に類するを知るべし。

第十七、第十九兩轉の三等韻は、具區別稍隱微なり。第十八、第二十兩轉の三等韻も、亦同様なり。第十七轉は第六轉に、第十九轉は第九轉に通ひたる

を見れば、第十七轉と第十九轉との別は、第六轉と第九轉との別に類し、又第十八轉は第七轉に、第二十轉は第十

外轉第二十一開

山 元 仙		' <i>án</i>	アヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
庄 阮 獨		' <i>án</i>	アヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
禪 願 線		' <i>án</i>	アヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
鎋 月 薛		' <i>át</i>	アツ
		' <i>ét</i>	エツ
		' <i>ît</i>	エツ

外轉第二十二合

山 元 仙		' <i>án</i>	ツヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
阮 獨		' <i>án</i>	エヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
禪 願 線		' <i>án</i>	ツヌ
		' <i>én</i>	エヌ
		' <i>ên</i>	エヌ
鎋 月 薛		' <i>át</i>	ツツ
		' <i>ét</i>	エツ
		' <i>ît</i>	エツ

蘇州音 *hien* と記するは漢音厦門音朝鮮音に類する *hien* の聲なり然るに吳音にては軒とコヌ言とゴヌと呼ぶと見ればオヌの聲もありしが如し是れ六朝中期の南音なるハ四等韻の *hien* よりしは動かざる所

官話にては二等韻の開と *hien* 山と *hien* と記す吳音の *hien* セヌ之に似てハ聲と近し蘇州音にては開と *hien* 山と *hien* と記すること漢音のカヌサヌに類す厦門音も朝鮮音も是に同じ三等韻カヌと官話 *hien* 蘇州音 *hien* 言と官話 *hien*

なり。

合轉の二等韻は、現時の支那音拗聲を省くこと多く、漢音吳音の假名も亦拗聲を留めずして、其形一等韻と異なる所なけれど、新しくは開轉と相對次せず。古へは然らざりしこと論無し。官話にて刷を *shuash* と記すること、拗聲の存在せることを示す。此轉の三等韻には、注意を要すべき事あり。此韻は *uen* の格なれど、吳音にては起、哀をラヌ、翻煩をホヌ、ボヌと呼ぶ。 *uen* の聲ありて、開轉の方に *uen* の聲あると一致す。翻煩は漢音にてはハメにて、官話も亦 *fan* にて寫す。吳音にて元、阮、願の *iguen* をグワヌ、月の *igwet* をグワツと言ふは、三等韻の聲ならず。是はグラヌ、グラツの轉なるべし。廣韻の反切、翻は孚袁切、煩は附袁切、元は慈袁切、ハメは袁のエヌを標準とすれば、翻煩元にエヌの聲ありて、翻はフエヌ、煩はフエヌ、元は、グエヌと爲り、三等字たるの格に協ふ。翻煩はハメ、元のグワヌの音の生じたるは、變調と見るべし。此聲聊か緩みと生じ、外轉なれども

唇音は輕に移る。四等韻は *uen* なるべかりしと開轉に準ず。その喻

母の下に在る者日ウの音と失ひてエメエツの假名と爲る。

外轉第二十三開

寒	'án	ア	ヌ
刪	'én	ヤ	ヌ
仙	'ien	エ	ヌ
先	'én	エ	ヌ
早	'án	ア	ヌ
潜	'án	ヤ	ヌ
獨	'én	エ	ヌ
銑	'én	エ	ヌ
翰	'án	ア	ヌ
諫	'án	ヤ	ヌ
線	'én	エ	ヌ
霰	'én	エ	ヌ
曷	át	ア	ツ
黠	át	ヤ	ツ
薛	ít	エ	ツ
屑	ít	エ	ツ

外轉第二十四合

桓	'uán	ア	ヌ
刪	'uén	ウ	ヤ
仙	'uén	エ	ヌ
先	'uén	エ	ヌ
緩	'uán	ワ	ヌ
潜	'uán	ウ	ヤ
獨	'uén	エ	ヌ
銑	'uén	エ	ヌ
換	'uán	ア	ヌ
諫	'uán	エ	ヌ
線	'uén	エ	ヌ
霰	'uén	エ	ヌ
未	uát	ワ	ツ
黠	uát	ウ	ヤ
薛	uét	エ	ツ
屑	uét	エ	ツ

外轉第二十五開

外轉第二十六開

上開合兩轉の韻は第二十一第二十二開合兩轉の韻と大に相近し。兩者二等韻の區別容易く判じ難し。此兩轉の三等韻に日吳音にオヌの聲無く皆エヌの聲なり。四等韻の區別尙更に不明瞭なり。後説明する所あるべし。

豪	<i>au</i>	アウ
爻	<i>au</i>	ヤウ
宵	<i>eu</i>	エウ
蕭	<i>eu</i>	エウ
脂	<i>au</i>	アウ
巧	<i>au</i>	ヤウ
小	<i>eu</i>	エウ
篠	<i>eu</i>	エウ
號	<i>au'</i>	アウ
效	<i>au'</i>	ヤウ
笑	<i>eu'</i>	エウ
嘯	<i>eu'</i>	エウ

宵	
	<i>eu</i> エウ
小	
	<i>eu</i> エウ
笑	
	<i>eu</i> エウ

官話、蘇州音共に、一等、二等は直拗の別明かざれど、二等、三等、四等は同形にて表はし、其間に區別無きが如し、今、等位と廣韻の反切とを考へ合はせ、表の如き別を設く。漢音は一等、二等共に直聲なり。吳音は二等は拗聲なり。一種の吳音と稱する古音にては一等は末二等以下はヨ、エの假名なり。朝鮮音一等は(오)의、二等以下は(으)의の格より。此轉の古韻の入聲は、後世鐸、藥、覺、沃に分れ屬す。其尾音の良(ㄹ)なるを見れば、此兩轉は喉韻なりと斷ず。

發聲は第二十六轉と、第二十五轉の中に併合せしむ。磨光は第二十六轉は第二十五轉の四等と全く同じく、但し宵、小、笑の第四等は屬すべき所

無き故、分けて此轉を立つるのみと記す。されば更に疑あり、曰く何故に四等韻に蕭、篠、嘯と宵、小、笑との別あるかと。此第二十六轉を立つるに、原作者の精細の用意と施したる痕あるは學識到らざる者の發見し能はざる所なり。

内轉第二十七開

内轉第二十八合

歌	、 <i>o</i> '	オ
哿	、 <i>o</i> '	オ
箇	<i>o</i> '	オ

戈	、 <i>uo</i> '	ヲ
果	' <i>uo</i> '	ヲ
遇	<i>uo</i> '	ヲ

漢吳兩音、朝鮮音(外)は*a*(*ɛ*)の聲なりと、韻鏡は官話、蘇州音と共に*o*(*ɔ*)の聲なり、漢魏及び六朝初期の古韻にては、歌の韻は屢々麻の韻と往來せり。麻の韻は元來模魚の韻より分れ出でたる者なりれば、*o*と*a*と變化は其間に生ずることなるべし。

古代第二十、第二十八の兩轉所屬の者は、第二十三、第二十四の兩轉所屬の者と往來したることあり。播、痺、儼、澆は第二十七、第二十八の兩轉の韻に屬する字なりと、其諸聲字の聲符なる番、單、難、寃は第二十三、第二十四の兩轉の韻に屬する其尾音の(ㄨ)なるを見れば、共に舌韻なるを示す。

外轉第二十九開

外轉第三十合

麻	<u>α</u>	ㄚ
	<u>ε</u>	ㄨ
	<u>ε</u>	ㄨ
馬	<u>α</u>	ㄚ
	<u>ε</u>	ㄨ
	<u>ε</u>	ㄨ
禡	<u>α</u>	ㄚ
	<u>ε</u>	ㄨ
	<u>ε</u>	ㄨ

麻	<u>uα</u>	ㄨㄚ
	<u>uε</u>	ㄨㄨ
	<u>uε</u>	ㄨㄨ
馬	<u>uα</u>	ㄨㄚ
禡	<u>uα</u>	ㄨㄚ

右の兩轉に就きて疑問の起るべきは、三等四等の兩韻の記法なりとす。漢音は二等韻は直聲なりと、他は拗聲にしてヤの聲にて表はす者多し。吳音は二等三等の兩韻は拗聲なりと、四等韻には直拗兩聲相混ず。此類古音には上の假名多し。官詁は概して本圖の記法に協ふ。二等韻の

又ハ漢音サ、吳音シヤ、官話 *shia*, 三等韻の舍ハ漢吳兩音シヤ、官話 *shie*,
 四等韻の些ハ漢音シヤ、吳音サ、官話 *shie*, 同しく邪ハ漢音シヤ、吳音ジヤ、
 官話 *shie* 有り。圖中の二等 *ai*, 三等 *ei*, 四等 *ie* ハ官話の *pie*, *pie*, *ie* に當
 るなり。

元來麻の韻トハ入聲ありしか、其入聲ハ後世轉じて他の韻に移り、去れ
 り。下、若、假射ハ去聲としてハ禡の韻に屬す。然るに入聲としてハ、下ハ鐸
 の韻、若ハ藥の韻、假ハ陌の韻、射ハ昔の韻に入る。諸聲字としてハ亞を聲
 符とせる處ハ入聲鐸の韻、者を聲符とせる者は入聲藥の韻、怕の聲符白
 ハ入聲陌の韻、禡の聲符席ハ入聲昔の韻に入れり。時の進むに従ひて平
 上、去の三聲ハ入聲と縁を絶ち、遂に之と他の韻に移らしむるに至れる
 なり。絶じて入聲ハ、始ハ無尾韻の方にありしも、後に至りて有尾韻の方
 に移れるなり。何れにせよ、上兩轉の韻ハ、其系統より推して、喉韻なるを
 察し得べし。

内轉第三十一開

唐	ang	オ	ウ
陽	ang	ヨ	ウ
	ang	ヨ	ウ
	ang	オ	ウ
蕩	ang	イ	ウ
養	ang	ヨ	ウ
	ang	ヨ	ウ
	ang	オ	ウ
宕	ang'	オ	ウ
樣	ang'	ヨ	ウ
	ang'	ヨ	ウ
	ang'	オ	ウ
鐸	ak	オ	フ
藥	ak	ヨ	フ
	ak	ヨ	フ
	ak	オ	フ

内轉第三十二合

唐	ang	ヲ	ウ
陽	ang	ウ	ヨ
蕩	ang	ヲ	ウ
養	ang	ウ	ヨ
宕	ang'	ヲ	ウ
樣	ang'	ウ	ヨ
鐸	ak	ヲ	フ
藥	ak	ウ	ヨ

口當口漢吳タウ縮口漢サウ吳シマウ方口漢吳ハウ長口漢吳テヤウ章
 口漢吳シヤウ良口漢英リヤウ懷口漢吳ジヤウ強口漢キヤウ吳ガウ唇
 口漢キヤウ吳カウ桓口漢シマウ吳サウ如口本居氏口此區別と

前に既に述べたるが如く、此
 兩轉は ^{br} 即ちオウの聲を
 リ、漢音吳音はアウの聲にし
 て、具假名の記法様々あり。一
 等は漢吳アウ二等は漢アウ
 吳ヤウ三等は唇音漢吳アウ
 舌齒半舌半齒の四音漢吳ヤ
 ウ才喉兩音漢ヤウ吳アウ四
 等は漢ヤウ吳アウリ例ハ

訂正し二等以下讀べて漢ヤウ吳アウと改めたりと、意却て到らず。太田氏の漢吳原音ヤウ次音アウの別は最も當らず。直拗論に於いて陳べたるが如く、吳音は能く等位に協し、只ニ等韻は拗聲の格なるに、獨り牙喉兩音に伴ふとき直聲となるは、稍不審と爲すべき所なり。朝鮮音を檢するに、亦之に類する者あり。廣韻の反切に徴するも、官詔、蘇州音に由るも、その拗聲なるべきこと論無し。唇音の拗より更に轉することあるは、此轉に限らざれば、別に怪しむに足らず。

此轉の *brug* の聲は今の支那南音に存す。是は漢魏の古音の痕を留むるものぢらべし。第十一、第十二兩轉の韻と、第三十一、第三十二兩轉の入聲の韻と、密接する關係ありしことは、前に既に説きたるが如し。噫、遠か入聲より唇の入聲、轉は傳の入聲より舌の入聲、莫は唇の入聲より舌の入聲、終は舌の入聲より舌の入聲に移りたるを見れば、舌の尾音を強めて舌の如く響かせ轉じて *brug* の韻の入聲に移らしめたるものなるべ

し。故に入聲の *ang* の聲より、*ang* の聲に轉じたるを見れば、之に對する平、上、去、三聲の *ang* (アウ) は古音にして、*ang* (アウ) は新音なりと判じざるを得ず。

合轉の三等韻は拗聲を落とすこと常なり。光、王の假名と漢、吳両音にてアウ、ウ、ウと記し、官話にて *kwang*, *wang*, 蘇州音にて *kwang*, *wang* と記するが如し。

外轉第三十五開

庚	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
	<i>ang</i>	エイ
清		
	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
梗		
	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
靜		
	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
敬		
	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
勁		
	<i>ang</i>	ヤウ
	<i>ang</i>	エイ
陌		
	<i>ak</i>	ヤ
	<i>ak</i>	エキ
昔		
	<i>ak</i>	ヤ
	<i>ak</i>	エキ

アにて二等韻と間隔あり。漢音エイ、吳音ヤウの格とれば、

ang より *kwang*

二等韻は官話、蘇州音共に漢音の如く *ang* (アウ) を以て表はす。吳音獨り拗聲を用ゐること上圖に同じ。三等韻は官話、蘇州音 *ang* 又 *yang* (ヤン)

外轉第三十四合

庚 清	<i>uang</i>	ウヤウ
	<i>ueng</i>	エ イ
	<i>ueng</i>	エ イ
硬 靜	<i>uang</i>	ウヤウ
	<i>ueng</i>	エ イ
	<i>ueng</i>	エ イ
敬 動	<i>uang'</i>	ウヤウ
	<i>ueng'</i>	エ イ
	<i>ueng'</i>	エ イ
陌 昔	<i>uək</i>	ウヤフ
	<i>uək</i>	エ キ
	<i>uək</i>	エ キ

韻目概して(可) *uang* 三等韻 四等韻 (可) *ueng* の概なり。

合轉の二等韻は漢吳兩音通例ワウの假名とれど、吳音は時にヤウの音と表はすことあり、横笛をヤウテウと言ふが如し。吳音は三等韻には合口音を現はざるを常とす。營をヤウ、傾をキヤウと呼ぶは其例なり。漢音の喉音の影母三等四等喻母三等にはエイ、エキの假名にて、合口音を示し、喻母四等には合口音を失はる、エイ、エキの假名を用ゐるゝ法とす。

外轉第三十五開

に移る中間として、當時の聲は、漢音のエイの如く *ueng* に移る。ハカリと推斷す。随つて四等韻は直聲 *ueng* と爲るべし。厦門音は *ueng* なること。漢音に似たり。朝鮮音は二等

外轉第三十六合

耕 清 青		<i>ang</i>	ヤウ
		<i>eng</i>	エイ
		<i>eng</i>	エイ
耿 靜 迥		<i>'ang</i>	ヤウ
		<i>'eng</i>	エイ
		<i>'eng</i>	エイ
諄 勁 徑		<i>ang'</i>	ヤウ
		<i>eng'</i>	エイ
		<i>eng'</i>	エイ
麥 昔 錫		<i>ak</i>	ヤフ
		<i>ek</i>	エキ
		<i>ek</i>	エキ

耕 清 青		<i>uang</i>	ウヤウ
		<i>ueng</i>	エイ
		<i>ueng</i>	エイ
迥		<i>'ueng</i>	エイ
		<i>uang'</i>	ウヤウ
		<i>ueng'</i>	エイ
麥 昔 錫		<i>uak</i>	ウヤフ
		<i>uek</i>	エキ
		<i>uek</i>	エキ

第三十五轉は、第三十三轉と其形相似たり。只第三十三轉の庚、梗、敬、陌は、二等、三等に跨れど、第三十五轉にては、耕、清、耿、靜、諄、勁、麥^昔の如く、二等、三等其韻を異にす。

陌、昔、清、青、靜、迥、勁、徑、昔、錫の別、具、秘訣を探ること、韻學者の常に苦む所なり。古韻の變遷を考ふるに、庚の韻には、陽の韻より轉じ來れる者はた

多し。庚、行、更、享、彭は其例なり。又聲符に由りて檢するに、圖に擧げたる開、
 磅、盲、趙、瞠、棖、杭、鑑、觥、鏡、諠、橫は、陽の韻に縁故あれど、耕の韻は陽の韻と與
 らず。梗、耿、敬、諍の別も之に隼ずべし。陌の韻に屬する宅、跖、格、額、迄、咽、赫は
 明かに鐸の韻に關係あれど、麥の韻には此事無し。兵、明、烹、卿、迎、英、兄は、古
 へは陽の韻に屬せしが、後庚の韻に移れり。病、景、慶、競、映、詠は古へは様の
 韻に屬せしが、後敬の韻に入れり。第三十九、第三十六の兩轉の二等韻は、
 第四十二、第四十三の兩轉の一等韻と、緣故ありしものと見え、棚、棚、登、登、
 宏、泓等は登の韻より耕の韻に移り、惺、惺、蜚、蜚等は德の韻より、麥の韻に
 移り入れり。

右の如き轉韻は、遠く漢魏時代よりの變遷に基うれど、隋唐の頃に至り
 ても、尚其性質に差異ありたるものか、陸韻を繼承せる唐韻に於いても、
 庚、耕、其他の類を分ちて、反切の別嚴然たり。是は唐陽の *bug, bug* より耕
 音の *bug* に近づける者、中間に於いて獨立し、庚清の形を保ちたるもの

りるべし。

消音、靜、通、動、徑、昔、錫の別、遷、微、なり。其説明は後に譲るゝし。

内轉第三十七開

侯	<i>ou</i>	オウ
	<i>iu</i>	エウ
尤	<i>iu</i>	イエウ
	<i>iu</i>	イウ
幽尤厚	<i>ou</i>	オウ
	<i>iu</i>	エウ
有	<i>iu</i>	イエウ
	<i>iu</i>	イウ
候	<i>ou'</i>	オウ
	<i>iu'</i>	エウ
宥	<i>iu'</i>	イエウ
	<i>iu'</i>	イウ

一等韻は官話 *ou* (アウ) 蘇州音 *iu* (エウ) と記す。假名は漢オウ、吳ウにて、漢音は本圖の音に近く、吳音は侯の韻の魚模、虞の韻に通ひたる時代の古韻を示

す。意ふに *ou* は *eu* の聲に近き所ありたるを、二等以下の音は、官話、蘇州音共に *iu* の格なり、時に *eu*, *eu* の聲とすることあり、周收と官話にて *shan, shau, shau*, 蘇州音にて *chen, cheu* と記するが如し。此類吳音は第一轉の入聲の屋の韻に通ふと見れば、喉韻なるを知るべし。朝鮮の音にては、一等は *eu*, 他は *eu* の格なり。

第三十八開

侵	
	<i>im</i> 1 4
	<i>im</i> 1 4
	<i>im</i> 1 4
寢	
	<i>im</i> 1 4
	<i>im</i> 1 4
	<i>im</i> 1 4
沁	
	<i>im'</i> 1 4
	<i>im'</i> 1 4
	<i>im'</i> 1 4
緝	
	<i>ip</i> 1 7
	<i>ip</i> 1 7
	<i>ip</i> 1 7

此轉の韻の吳音にはオの聲あり音をスム金をコム品とホムと言ふか如し母音のこのとの關係は尾音のムと

のとの別にて、第十七、第十九の兩轉に對す。朝鮮音にては此韻の聲は^{イム}にてオムとイムとの開に在するが如し。

第三十九開

覃	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
咸	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
鹽	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
添	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
感	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
疎	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
琰	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
添	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
勘	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
陷	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
豔	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
檢	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
	<i>am</i> 1 4
合	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
洽	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
華	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
牀	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7
	<i>ap</i> 1 7

第三十九第四十の兩轉は其韻の區別後世の音を以て判じ難し年代遠きに過ぐと雖も先秦時代の古韻を參照す

より、第三十九轉の諸韻には第三十八轉の諸韻に屬せし者と緣故あ

第四十開

談 銜 嚴 鹽	<i>ám</i>	アム
	<i>ám</i>	ヤム
	<i>ém</i>	エム
	<i>ém</i>	イム
敢 檻 儼 琰	<i>ám</i>	アム
	<i>ám</i>	ヤム
	<i>ém</i>	エム
	<i>ém</i>	イム
關 鑑 釅 豔	<i>ám</i>	アム
	<i>ám</i>	ヤム
	<i>ém</i>	エム
	<i>ém</i>	イム
盍 狎 業 葉	<i>áp</i>	アフ
	<i>áp</i>	ヤフ
	<i>ép</i>	エフ
	<i>ép</i>	イフ

りし者は多し。咸、參、果、南、覃、
湛、僭、合、叶は其例なり。諸聲字
の組織を觀るに、暗、含、探、湛、
孃、拉、笈、又、覃、參、簪、稔、給は兩者
の關係密接なりしを示す。第

四十轉の諸韻の、第三十八轉の諸韻に通ひし者ありしは、至つて稀なり。
九、今金の、耽、黔、銜と別類と爲るが如きは、寧ろ例外に屬すべき、漢以後の
轉音なり。古韻と異なりて、坎、陷、紺、儼、斬、湏、天、宴、甲、狎の類は、其系統を離れ
て、別類なる第三十九轉に入り、又三、衫、銜、喊、鐵、階、燂、儼、踏、踏の類は、其系統
を脱して別類なる第四十轉に移り入れり。古韻にては、總じて三等韻と
四等韻とは第四十轉に入る可きものとす。
第三十九轉の一等韻に屬する、含、紺、南、曇、諸等を、吳音にてエム、コム、ノム、
トム、オム等と書くことありて、第三十八轉の韻と同系なるを示し、その

古韻に協ふことを明かにす。朝鮮音も亦此格なり。第四十轉の一等韻にも同様の例無きに非ざれど、見當ること多からず。寧談の兩韻は、庚利の兩韻の如く、隋唐の頃に其聲相近かりしと雖も、其性質に於いては尚差異ありたることなるべし。二等韻の別は、一等韻に準じ、而して共にヤムノ聲よりしが如し。

三等韻はエム、エフの格なり。吳音にヨム、オフカ格ありて、第二十九轉の鉏とゴム、第四十轉の籤とゴム、業とゴフと記する例あり。朝鮮音是に類す。第三十九轉の三等韻には、第三十八、第四十兩轉の韻より移れる者殆ど相半す。然るに第四十轉には、第三十八轉より移れる者其數甚だ少し。聊か以て第三十九、第四十兩轉の三等韻の、本來の性質に於いて異なりたる所ありたるを窺ひ得べし。第三十九轉の、三等字なる奄とアムノ聲に用ゐたる例あり。韻鏡と程隔たりたる時代の古音なりしが如し。

兩轉四等韻の別は難解なり。其説明後に譲る。尾音 m と n との差にて、第

外轉第四十一合

凡	uém I 4
記	'uém I 4
梵	uán' I 4
乏	uék I 2

るに、其關係兩轉に跨る者あり、故に±のしく兩轉に對するものと見て、差

漢音アム、吳音オム、の格なり、即ち凡ハ漢ハム、吳ホム、法

蘇州音 *Su-chow* 江

上 官 詔 *Shō*, 蘇州音 *Shō*, なり。唇音の輕と腐とは、第二十二轉と同く、母

韻變化に従ひて、其音に緩みを生じにるに由ることを知るべし。朝鮮音は

吳音と同来な雙三等韻のエムなるは覺の韻に属する會母の漢音ケムに

るに由りて之を察すべし。

内轉第四十二韻

登	ong	オウ
蒸	ong	ヨウ
等	ong	ヨウ
梗	ong	オウ
澄	ong	ヨウ
德	ok	オ
職	ok	ヨ

内轉第四十三合

登	ong	ヲウ
蒸		
等		
梗		
澄		
德	ok	ヲ
職	ok	ウヲ

萌登と官話にて *hang, tang* 蘇州音にて *hang, tang* と記す。入聲り北
官話日蘇州音の如く *hang* と呼び蘇州音日又 *hang* と唱ふ。德日官話

又即登の音なることは適切
に我假名カオ又羅馬字カオ
に當るべき聲りさか如し第
四十二轉の一等韻は第十七
轉の一等韻又第三十七轉の
一等韻と其類と同じうし官
話日 *hang* 蘇州音日 *hang* に
て熟了故に *hang* は *hang* に近
き所りりたるべしと推察す

蘇州音共に *leh* と言ふ、二等韻にも亦此聲ありて、官話にて側を *leh*、
色を *sek* と記して、之に對する三等韻職の *shih*、識の *shih* と分つと
見る。三等韻は *ing* なるか、*ing* なるか、疑問の起る所なり。漢音、吳音共に
ヨウ、オウの假名なり。吳音は牙喉兩音宛の極應の處に對するが如く、平
聲去聲の入聲に對し、其母音を同じうすれど他音の下にて然らざる場
合多し。平聲澄のデヨウ、入聲直のデキ、又去聲來のジヨウ、入聲食のジヤ
の如きは相協はざる例なり。官話の *ing* は吳音の入聲に通ふ。澄と *ching*
來と *ching* と記するが如し、牙喉音の宛應も *ching*, *ching* と記す。蘇州音
は二等、三等、四等を通じて *eng* の聲なり。四等韻は三等韻と直切の差あ
るのみ。 *eng*, *eng*, *ing* は其聲相近しと知るべし。朝鮮音にては總じて (으)
eng の聲勢と占め (으) *eng* の聲之に混ず。